
こんなにも醜く薄汚れた世界

音舞羅 阿瑠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こんなにも醜く薄汚れた世界

【Nコード】

N0308L

【作者名】

音舞羅 阿瑠

【あらすじ】

剣	銃	死	崩壊	総理大臣	父親
虐殺	戦争	仲間	学校	石	セフィロト
マフィア	小説家	情報屋	僕のターン		
抗争	逃走	復讐	壊す		

「俺達も徴兵されるのかな…？」

「ば…ばか！」

「時には人は…鬼にならなければならぬときだってあるさ」

「息子よ、みろ！　これが、これが私の望んだ世界だ！」

「ふふふ…ふははははははあはははは…！　　どいつもこいつも馬鹿だ！

全ては僕の手の中にある！」

「小説家…あんまり調子に乗るなよ…？　世界はこの僕のものだ」

「…全てはあなたのお召のままに…」

「死ね！　死ね！　みんなみんな！　死んでしまえ！」

「ごめんね…みんな、さようなら…」

？章「世界剣銃協会所属高等学校」

「The our world」

？章「世界剣銃協会所属高等学校」

「・・・はあゝというわけで、今回の補修第2科目目。数学は終わりであゝすゝ龍君？聞いてましたあゝ？」

「あゝはいはい。聞いてましたよー」

そう、今日は補修の日。補修というものは、バカが受けるもので・・バカ以外にもサボってるやつとか、不良さんとかが受けるもの。おれは前者のほうだ。そもそもこの学校の教科はちよいと変わっていて、銃やら剣術やらがある。銃、剣は常に所持可能だそうだ

「龍くゝん？ぼけえゝとしないで、次は龍君が得意な銃ですよゝ？武闘場に早く来てくだっさいねゝ先生はあゝ先にいつてえゝまってますよー」

今喋ったのが先生。背は低く、髪を肩のあたりまで切っている。どうしても大人には見えない童顔。幼児体型の持ち主。ロリコンといわれる人たちは大好きな類かもしれない。ちなみにおれの見た目は黒髪長髪。黒目。背は高い方だ。

「さてと・・・武闘場に行きますか。行くよバルン。アヤナ。」

おれは二丁拳銃のバルンとアヤナをホルスターにしまいこみ、武闘場へと歩き出した。この日補修はおれ一人しかいなく、すこし心細

かったし眠かった。

「ていうかさあゝ補修ながくない？」

「はっはっは！いいじゃねえゝかあゝおれは長いほうがいいぜえゝ？お前がいやならおれはいいんだあ」

バルンが喋る。

完璧にどSっ気が漂っている。おれはMではないから、なかなか釣りあえない。

「お前はDSですかあー？おれはMではないんですけどー？いじるのならアヤナをいじったらあ？」

「ちよつとっ！なんで私がでてくるのよっ！」

「はっはっは！そりゃぁいい！」

歩きながら笑う一人と2つ。

ゆっくり行つてると怒られるので、途中から走っていった。

「遅いですねえゝりゆうくんー」

「先生、なんであいつが龍君なんですか？他は名字にさん付けなのに」

「御恵さん、フラグって言葉してますゝ？うふふー」

「・・・やっぱりか・・・」

武闘場はものすごい広く、心地よい日の光が差し込んでいる。よくわからない会話をしている二人がいるが、それはほっておくことにした。

「あ、来ましたあゝ」

「もう、遅いで？」

おれは危つく「うげ・・・」とつぶやくところだった。まさかまさかの人物がいるからだ。

「なんで美菜がいるの？」

「なんでって、今回の補修の相手。私やからに決まってるやん」

目の前の天然茶髪の背が低い関西弁を喋る少女は補修の相手は自分だという。

「お前が・・・？そんなの身がもたないんですけど・・・？だいいち銃でしょ？お前、剣じゃん。え、銃と剣の戦いですか？」

「そうですねえ、今回龍君と御恵さんとの真剣勝負ですう。いやあ、個人的に見てみたかったんですよねえ、二人の対決」

なんとも変な理由だ。個人的に勝負が見たかったがためにおれはこの最強少女と戦わなければいけないのか。おれはふうとため息をついた。美菜は刀を布の中から取り出し、準備をしている。どうやら本当にやらなければならないらしい。おれには昔から死亡フラグやらなんやらあらゆるフラグが立つという不幸な人間だ。

「しょうがない。か・・・」

おれも準備をした。バルンとアヤナにパレットをいれる。ホルスターのカバーをはずし、銃に手をかける。二つも準備完了といわんばかりに張りきった様子だった。（これは銃の光り具合でわかる。）

「あんたとやるなんて久しぶりやなあ、学園祭以来？まあ、楽しむやあ」

美菜曰く勝負とは楽しむもの。らしい。

軍人にとっては卑屈だろうな

「じゃあ、準備はいいですか？ よぉーい始め」

合図と同時に瞬間でホルスターから2丁拳銃を取り出した。そして美菜の刀の鞘を狙って撃つ。まずは威嚇だ。美菜は微動だにせず、鞘から刀を引き抜いた。

「ふうん。威嚇ってわけか、上等やね」

彼女は刀を抜くと目つきが変わる。

ここからが危険なのだ。本気で死亡フラグが立つかもしれない。

彼女は刀を構え、駆けだした。こっちに向かってくる。おれはとりあえず構えたまま動かないことにした。

むやみに動いては無駄に体力を削る。

「いい判断やね」

「こりやどうも。おれも曲がりなりに銃の段は4段。黒帯なんですね。判断くらいわつと・・・！」

美菜の刀が横をかすめた。おれはすかさず横に跳躍してかわす。そして、地面を転がっているときにバルンで一発刀身を撃つ。美菜は刀身に来るのがわかつているのか、かわそうともせず防ごうともしない。

ちなみにバルンは右手。

「ふっ・・・やつぱり死亡フラグおったちじゃねーか」

「わけわかんないこといわんのこっからが楽しいんやない」

美菜は刀を構えながらいう。普通のトーンで言っただけにすごく怖く感じる。

「じゃ、本気でいきますかあ」

「そうこなくっちゃね」

俺はふうーと息を吐いて、走り出した。

武闘場には岩のような障害物がところどころにあるので銃を使う身にとってはすごくありがたい。もちろんおれはその岩の方向に走り出した。走るのは速いので美菜は追いつけない。

「やっぱり障害物を使うんか。やけど、どんだけ速くても追いつこうと思えば追いつける！」

美菜も走りだした。俺が向かったはずの岩に向かって。俺は完全に気配を消していた。

「ここやねーさあ、おわりっ！」

美菜は岩に回り込み、横なぎに刀を振るった。が、それは空気を斬っただけ。

「いないっ!？」

おれは音がしないようにサイレンサーをつけて、美菜のターゲットを撃った。この勝負はターゲットを破壊したほうが勝ちなのだ。

「…甘いね。」

美菜はすぐさま振り向き、弾を刀ではじいた。

「やっぱり実弾じゃあ限界がありますかあ」

「おもしろくないなあゝもうちよつと楽しませてえーやー」

「最強少女さんの期待に応えられるかどうかからんですけどー
？お楽しみアイテムをつと・・・」

おれはパレットを入れ替えた。こんどはバルンとアヤナのどちらとも入れ替える。

そして右も左も同時に引き金を引いた。

「アクアパレットッ！！」

「……！！」

銃からは、水の塊が飛び出した。

今度は刀ではじかず、後ろに跳躍してかわした。その間おれは一瞬でパレットを入れ替える

「フレアパレット！！」

「今度は火の弾！？」

火の弾が銃口から飛び出し、美菜のターゲットめがけて一直線の軌道を描く。

だが、反射神経が良すぎるのでこれもまたかわされた。

「おもしろくなってきたねえーそろそろ私も本気ださなな」

美菜は構え方を変えた。腰を落とし、水平に刀を構えている。なんていったっけ・・・

平塚流剣術というやつらしい。

「やつべ・・・本気ださせちゃった」

美菜は勢いよく突っ込んできた。気配を隠していても今の美菜にはばれる。正々堂々の勝負をするしかない。

「おれだつてまだまだ隠し玉あるんよ!？」

おれはアヤナを一旦後ろ腰に戻し、バルンのパレットを一瞬で変えた。

そして岩から飛び出し、美菜の前に立つた。美菜はそのまま水平に斬ってきた。おれはそらを後ろに跳んでかわし、銃を水平にして撃つ。

「八連射型大弾!!」

銃口から絶え間なく弾が八つ発射される。

一発目は刀の柄にあたり、他はターゲットめがけて軌道を描く。美菜は刀をはじめかれ、啞然としている。そして残り7発がターゲットを破壊。

「ふうゝ・・・勝った・・・」

「試合終了ですゝおつかれさまでしたあゝ」

快勝。初めての快勝。平塚流の型を出される前に勝った。

「ふー・・・私の負けかあーこんなあつさり負けたんはじめてや」
美菜は飛ばされた刀を地面から引き抜きながらつぶやく。そして、こつちにやってきて握手。

「いやあゝいいもの見ましたあゝありがとうございますゝ補修は

終了ですお疲れ様でしたあゝ」

「先生、今日の補修この試合の口実だとか言わないですよ？なんか先生を見てるとそうとしか思えないんですけど」

「やだなあゝそんなわけないじゃないですかあゝ龍君。試合は見て楽しかったですけどねえー」

おれはこの先生は本当にこの試合が見たかっただけじゃないかと思っただ。

最近の教師は試合が見たいから教師になったという人も多いほどだからたぶんこの先生もその類じゃないかと

「じゃあ、帰るか。美菜。今日は疲れたし早く寝たいなあゝ」

俺は武闘場の出口に歩きながら言う。

美菜はあわてて走ってくる。背中に刀の袋を提げているのでどこか物騒だ。

そついうおれも銃を装備しているのだけれど

「うわ…まぶし…たく、武闘場は暗すぎるんだなあゝだから出た時ものすごい眩しくて目がやられる」

武闘場を出たとたんにまぶしい夕方の光が目をさした。ちょうど夕日が昇る時間なのだ。

午後6時。時計を見たらそう記されてあった。

「たしかに暗いよねー少しは日がさしとるけどね。それでも外と比べると暗い」

俺らは校門に向かって歩きながら喋っていた。靴箱で靴を履き替え、

そこから100mはある校門に向かって歩いている。思った通り夕日がきれいだ。

「うわあ…綺麗やねえー」

「そうだなあ…綺麗だな。こんな夕日を見ると言葉が次々と浮かんでくるよ」

「また小説？それとも歌詞？」

「ははっ 歌詞だな。今回の場合は」

俺は作詞やら小説書いたりいろいろなことをしている。物書きなのだ。

俺達は校門を出た。校門には「世界剣銃協会所属高等学校」と書いてある。長くて覚えにくい名前だ。世界剣銃協会とは簡単に言えば軍隊のこと。その所属なのだからいつかは徴兵されるだろう。おれは行きたくないが…

その後も歩きながら喋る

「なあ美菜あー」

「ん？どしたあ？」

「いつかはおれらも徴兵されるのかな」

「大丈夫やでりゅう。だって、今世界はみんな不可侵条約結んでるし。」

「そうなんだけどさあ…日本の総理大臣が戦争したがってるじゃん。だから…」

「りゅう…」

「おれはさ、一人の人も争いなんかで死んでほしくないんだよね…」

おれは思わず涙を流してしまった。

男らしくないと笑うかもしれないが、本当にこのことを考えると涙がでるのだ。

「大丈夫。大丈夫。戦争は起こらんよ。きっとね」

美菜はそういうおれを弱く抱きしめた。普通逆だと思っただろうが、美菜はこういう人だ。

ちなみに美菜はおれの彼女。

おれはその小さな腕に少しの間抱かれていた。

そして落ち着いたら、また歩きだした。

その時にはもつと明るい話題を話した。

そしてしばらくすると家について、その日はそこで別れた。

「またねっりゅうーっ」

「おう。またなあー」

二人は手を振り、家に入った。ちなみに家は向かい合わせだ。

そしておれは家に入っすぐベッドに横になった。さっき抱かれた余韻に浸りながらその日はすやすやとねた。

？章「世界剣銃協会所属高等学校」（後書き）

さてさてー

新作登場！！

まだまだ文がつたないですね

改善点満載です

だけれど世界観は作りこんでいるつもりですよ

感想、批判でもばっちこいなんで

感想おまちしています

感想返しはもちろんしますよー

2章「にぎやかな朝は」

2章「にぎやかな朝は」

「…ふわぁ…んー…あ、朝か」

おれはゆっくりとあくびと伸びをしながら身を起こした。ベッドの横の窓からは柔らかい朝の日差しが降り注ぎ、非常に心地がよい。こういう日には布団を干すのが一番なのだろう。そしてふと庭の方を見るとなぜか布団が干してあった。…もしかして

「なんか予感がするんですけどー」

おれはため息交じりにつぶやいた。そしてリビングに向かう。すると予感的中した。

「あ、おはようー起きたんやね。朝ごはん作ってるから、ちよろつと待つつてね」

美菜が制服にエプロン姿でそこにたっていた。

「あの、美菜さん？なんでここにおられるのですか？」

俺はなぜか敬語で聞く。

「なぜってー彼女が彼氏のうちにご飯作りに来ちゃいけない？」

「そういうことじゃないんだけどよ。朝はゆっくりと過ごしたいというのがありあましてー」

美菜はちよつと頬を膨らませている。

包丁を動かしながらしゃべっている。料理はかなり得意な方なのだ。

そうでなければ作りながら喋るといふのは不可能。おれはもちろん無理。

「なんやねん。私がおつたらゆつくりできひんの？」

「そういうことじゃないんだけどさあ——なんというかあそう、一人でいたっていいかなんていうか？」

俺は朝から騒がしいのが嫌いなのだ。朝は静かな方がいい。うん。そのほうがいい。

「ああ、そういうことね。残念でしたあー私がいるからには静かな朝は望めませんよ」

美菜はおどけていう。

「はっはっはっ！もともと俺様がいるから無理なんだけどな！」
バルンが調子にのって朝から大声たてる。

「バルン、ちよつとうるさい。近所迷惑」

「そうだよ、龍一の言うとおり。ちよつとはトーン抑えなさいよね」

今度はアヤナまで会話に参加してきた。

二人と二つの会話。静かになるはずがない。

「はあ……到底静かな朝は無理か」

「そう、あきらめえやあ——はい、できたよ」

美菜は朝食を皿に盛り、テーブルに並べてくれた。そして美菜もテーブルに座り、向かい合わせて食べる。今日のメニューは目玉焼きとパンとコーンスープとサラダだ。

朝からこんなに食べられないのは言うまでもない。

「いただきまーす」

「いっただっきますっ」

それでも食べないと怒るので食べる。

まず目玉焼きを口に入れた。やっぱり美菜の料理はおいしい。目玉焼きというシンプルなものにしてもやさしい味になっている。

しょうゆやソースなどをつけなくても十分に美味しいのだ。

しばらく夢中になって食べた。美菜はそんな俺をみて嬉しそうに食べている。そして数分後何とか食べ終わった。

いくら味がよくても量が多すぎてちよつと時間がかかる。

「ごちそうさまぁーおいしかったぁ」

「お粗末さま。それよりも急がないとやばいかもね。時間」

俺はすかさず時計を見た。時刻は八時を指している。学校の時間は8時30分からだ。

「うわぁ…やっべ。急いで着替えないとっじゃぁ着替えてくるから、玄関で待つてて！」

「うん。そうする。急いでやぁ？」

俺は畳の部屋に行き、戸をしめた。部屋中にわかってるよと声が響く。

かかっている制服をとりだし、パジャマから急いで着替えた。そしてバルン、アヤナを身につけて上からブレザーを着る。

そして戸をあけて玄関に急ぐ。

「じゃあ、いこっか。走っていかないと間に合わないかもな」

「うん。そだね。走ろっか」

いつてきますと二人で告げるとドアを開けて飛び出した。鞆を抱えて走る二人。

木々や人々、建物がすぐ視界から流れていく。

最初は光が少し眩しくてそれらを直視できなかったが、今はもう慣れてきたのでそれらの景色を見ながら走る。ここから学校は遠い。

二輪車通学は禁止なのでいつもこんな感じだ。

「ああーああーなんで二輪車通学禁止なんだろなあ」

走りながら文句をつぶやく。いつものこと。

「さあね、そんなの学校委員会にきかんとわかんないよ」

学校委員会とは学校を運営する人達の組織だ。

先生は入っていない。基本はだが。

そこで学校のことやらなんやらいろいろ決めているらしい。らしいというのは、ほとんど生徒には知らされないからだ。

見えないところで決められた決まりに知らない間に従わされているのが俺ら生徒。

まったくおかしい話だとつくづく思う。

「まったく、忙しくて騒々しい朝だな」

「はっはっは！まあこっこのもいいじゃねえか！」

「そうやでーあさっていうものは少し騒々しいほうがいいんよ」

どうもこの二人とは意見が合わない。だったらなんで美奈と付き合い
っているのか。となるが、意見の違いと好きかどうかは関係ない。
バルンの声は少し揺れていた。俺の体が揺れているのだから、バル
ンも揺れるのだ。

走り始めてから25分。やっと校門をくぐることができた。

「やっと着いたあーっ！」

「よっ、今日も遅刻ギリギリに校門くぐってんな。」

「鴨井か…お前後輩のくせに生意気だよ？」

おれだからいいものの、他の人に同じ態度とつたら殺されるかもな」
目の前の鴨井と呼ばれる男は金髪ツンツンのどつかのアニメで見た
ような頭。

後輩なのだが、同学年のような態度をとってくる。

「りゅう、早く教室入らなきゃ先生にまた怒られるで？」

「ほんとだ。じゃ、鴨井またな！」

俺らはまた走り出した。一〇〇ほど距離のある下駄箱に向かう。ぎ
りぎりの時間なのでここらへんには人がほとんどいない。

俺は靴を履き替え、教室にむかった。

学校内は広く、最初のうちは迷ったが今はもう慣れた。階段を上が
り、教室に入る。おれらは2年で2年は2階なのだ。

すると案の定全員集合していた。俺と美菜は隣の席で、その二つだけぽっかりとあいていた。

「いつものことですけど、遅いですよー龍君と、御恵さん？」

「すいませーん。家遠いもんですからねーそれに遅刻してないんだしいいじゃないですかー」

「そうそう、先生はかたすぎですよ」

おれらは全く反省する気もない。だって毎日のことだから。そしておれらは席に座った。そして鞆を机の上において用意を取り出し、机にしまふ。ノートパソコンと筆箱だけは机の上にだしておく。いつでも小説が書けるように。

「じゃ、揃ったところでそろそろショートホームルーム始めますよー」日直おねがいしまあーす」

「起立、気を付け、礼。」

ーおねがいしますー

全員ががちゃがちゃ音を立てて立ち上がり、礼をし、またがちゃがちゃ音を立てて座る。

そしてSHR 通称“ショートホームルーム”が始まるのだが、俺はほとんど聞いていない。

席は窓側。日差しが包んでなんとも眠りたくなる席だ。だけど俺は授業中以外は寝ない。小説が書きたいからだ。ということは授業中は寝るのだ。授業中寝るなよと突っ込みたいと思うが寝ないとやってられない。

おれは音がしないようにキーボードをたたく。

今書いている話はファンタジー小説だ。多くは語れないが簡単に言うところ「日本とイタリア両国の交友関係を持つとする主人公たちの話」本当はここで紹介したいのだけれどこれはまたちがう話だからまた今後の機会にしよう。

「と、いうわけでえゝ終わりますゝ」

「起立、気を付け、礼。」

―ありがとうございました―

小説を書いているうちにショートホームルームは終わっただけらしい。おれは大きな伸びをして、パソコンを閉じた。

「ねえ、全然きいてなかったやろ？」

「駄目だよ？ 龍くん。ちゃんと先生の話はきかなきゃあ」

「…あ、美菜と蘭かあゝいやあー先生の話しさあー小説のアイデア浮かんだもんだから、ついさ」

おれは頭を少し掻きながら言う。

ちなみに美菜の横にいるのは伊藤蘭といって美菜の大親友。おれの友達でもある。とある疑惑が持ち上がっているのだが、話すのはやめておこう。

「そんな感じで今日の授業ずっと過ごすつもり？」

「今日の授業なにがあったわけ？」

「えっと、数英伊理剣銃だよ」

だるいのしかない。だけど最後の剣銃だけはいい教科だ。剣銃はセツト。一教科だ

「じゃあ剣銃の授業だけまじめにやるわ」

「あかんから。まじめに受けなさいっそんなんだから補修になるんよね」

「はっはっは！言われてんぞ！龍一さんよぉ！」

俺は軽くバルンをたたいた。こうすると自分の腰にも衝撃が加わるのだけれど、気にしない。

「あ、らんー私ちよつと刀手入れしてくるわぁーりゅうの相手よろしくねっ」

「なんだよそれ」

俺はくすりと笑った。蘭も笑っている

若干呆れているけれども…

「りゅうくん？ほんとに授業うけなきゃだめらよ？」

「ら？」

俺は吹き出して笑った

つられて蘭もまた笑う。おれは耐え切れずに声をだして笑った。そしてその笑い声を撃ち消すかのようにチャイムになる。

あわてて席に座る蘭。それを見るおれ。美菜はまだ刀を研いでいる。さぁ、授業の間に少し話をしようか。そうだなあこの世界の話でもしよう。

2章「にぎやかな朝は」(後書き)

バルンうざいですね

いちいち声大きく笑うという銃

あつたらいやですね

絶対つかってやらない笑

さてと、主人公の話でもしましょうか

主人公の秋沢 龍一くんはですね

めんどくさがり屋です

授業サボります。そのくせ部活にきます。

今回も授業さぼります。

まあ次回になるんですが

そのせいで補修になるわけですね

そして補修もろくに聞いていないわけで…

まあ小学校でならったことのおさらいですから
さぼってもいいんですけど

3章「旅行部」

3章「旅行部」

さあここで少し社会のお勉強だ。もっとも俺は社会が苦手だけれど。まあそんなことはどうでもよくて……少しこの世界のことをお勉強しよう。まずこの世界は西暦二千三百六十年

世界は十力国しかない。日本、イタリア、ドイツ、フランス、中国、ロシア、アメリカ、カナダ、コンゴ、リビア。この国々は不可侵条約を結んでいて、侵略や戦争はできない。

一見平和そうな世界だ。だけれどここ東京には今俺が通っているような物騒な学校もある。

なんでも教科に戦闘知識等の科目。戦闘の実習があるそう。俺はそっちのほう得意で、教科としては好きだけでもと闘うのは好きではない。まあ、どの世界にも陰と陽があるのだけれど……とまあこんなところかな。詳しい歴史はそのうちわかるだろう。

「起立、気を付け、礼」

—ありがとうございます—

授業は終わったようだ。え？短いつて？

いいじゃないか別に。俺達の授業は一時間が20分と短い。たとえば数学は難しい方程式などはほとんどやらない。生活に最低限必要なことしかここでは教えないのだ。だから20分程度でいい。だか

ら少し解説している間に授業が一通り終わってしまったということだ。

「龍、またボーっとしてたやろ？」

「もう、ちゃんとうけなきゃだめって言ったじゃないですかあゝ」

「あ、ごめんごめん。いやあゝちゃんと受けろってのが無理な話なんだよな」

二人に怒られてしまった。まあこれもいつものことである。そろそろ部活の時間だな。

「じゃあ御二人さん部活行きますか」

「うん。行こうっ」

「つて、ごまかしてもだめですよ？」

俺は走って部室に向かった。蘭は少し呆れている。俺は部活以外学校にはあまり来たくない。だけど部活は好きだ。え、何部かって？

――旅行部――

そう、旅行をする部活。でもただ旅行をするというだけではない、文化交流が目的なのだ。

まあほとんど御遊びの部活になっているけど

顧問には学校さぼってもいいから部活だけは来いよと言われている。

「ちわあーす」

「先輩じゃないすかあゝ遅いですねえーい」

「鴨井、お前その喋り方やめろ」

俺は鴨井の頭をこつんとたたいた。

あとから続いて美菜と蘭が入ってくる。どうやら俺達が最後らしい。ほかの部員（他は二人しかないが）は全員集合していた。

「羅衣と二人で退屈してたところなんすよぉ〜美菜さんにー蘭さん、こんにちはー」

「こんにちはーあんたの喋り方ってなんか誰かに似てるんよねー」

美菜は靴を履き替えながら何かを考えている。

おれは席に座り、蘭も席にすわった。

「美菜、早く座れよ。今日はあさつての旅行計画だよ」

「ああ、はいはい。今座るよ。てかさ羅衣、ちよつとはしゃべったら？」

「あーそうですねーなんかーめんどくさかったんで」

「喋ることがめんどくさかったらぁ〜うちの部活やってけませんよぉ〜」

そう半おしゃべり部のうちの部はおしゃべり好きな人ではないとやっていけないような部活だ。

「じゃああさつての旅行についての計画を立てるぞ。行き先はこの前決めた通り兵庫県の三田市。目的はあくまでもその状況、文化を学習するため」

「どうせ部長がいつも脱線させるんだけどねえ〜いん」

鴨井は一々話に水を差してくる。

部長とは俺のこと。柄に合わないかもしれないが、一応部長なのだ。

顧問が学校こないやつのほうがやることなくて忙しくならないからお前が部長でいいだろうと言ったのだ。

「鴨井、少しだまってようかあー」

「で、他決めることあるんでしょ？部長」

美菜が話を戻してくれる。なんともありがたい。

「そう、日にちと時間はこの前決めた通りだけど、持ち物と集合場所等がまだ決まっていない。」

「はいっ！武具は持ち物にいれるん？」

「んー入れようかどうか迷い中。」

「おいー入れてくれよおっ龍一さんよおー」

バルンが話し入ってきた。バルンは家に置いてかれると次の日うるさい。退屈するのがいやらしい。

「んーバルンがうるさくなったら困るから武具も持ち込み可とするか。」

「よし。これで向こうでも稽古ができるね水月」

「はい。そうですね。」

美菜の武具も喋る。

というか、武具はみんな喋る。

もちろん羅衣の武具も蘭の武具も鴨井の武具も全部だ。

「美菜さんの稽古はデえ〜ンジャラスでえ〜スパぁーキングなぁ〜感じですよえ〜ん」

「鴨井、あんたよかったら稽古に付き合っ？」

「ちよっ、美菜さんそれは勘弁願いたいですねぇ〜」

「じゃあその喋り方やめなさい」

鴨井はいつも美菜にこうして殴られる。やたらと鴨井は美菜に構うのだ。そして俺にも。

というかこの部員全員に。

普通にしていたらかつこいいのだけれど…

「はい、じゃあ武具の持ち込みは可として他になんかない？持っ
ていきたいもの」

「ぶつちよ〜。バナナはおやつに入りますかあ〜」

「小学生か。お前は。はい、他あ〜っ！蘭とか羅衣とかはなんかない？」

おれは鴨井にはなるべく突っ込まず、でも少しは突っ込んであげないとかわいそうなので少し突っ込んでから蘭と羅衣に話を振った。

「私はあ〜ん〜…」

「あ！本持つていきたい！」

「本かあ。それくらいならお〜けいだな」

俺はその本の種類は聞かないでおくことにした。聞くと例の説を肯定してしまう。

「羅衣は？」

「んー…ミュージックプレイヤーとか」

「ミュージックプレイヤーかぁ…小さいやつなら可とする。」

小さいミュージックプレイヤー。携帯音楽機器だな。

「他にない？ないならこれで持ち物の話は終わりだけど」

「ない」

みんな一斉にそういう。いつも持ち物の話は盛り上がってなかなか進まないのに今回はスムーズに進んだ。（約一名がふざけなければもっと進んだのだけれど）

「じゃあ次は集合場所の話だけど、西口駅前でもいいか？」

「西口言ったらあゝ渋谷あゝですかぁー？」

「そうだよ。てかここ渋谷だし、普通そうだろ」

「鴨井はばかだね」

羅衣が静かに突っ込む。突っ込むというよりはけなしに近い。

「はい！渋谷駅西口前でいい？」

俺は無理やり話を進める。

半ば強引にしないとこの部活で物を決めるにはかなりの時間がかかる。

「ええですよー」

話しあい終了。かかった時間はザッと1時間半。短い。いつも3時間くらいはかかるのだけれど。

「じゃあ話しあい終了だなあゝどうする？まだ時間あるけど」

「そつといえば顧問きとらんよね」
「そいでつすねえ〜ん」

確かに顧問は来ていない。何をしているのだろうか。決まったことを渡さないといけないのに。

「鴨井、ちよつとよんでこい」

「ええ〜なんでぼくがあー」

「後輩やる？ほら、いつてき。あとでバナナあげるから」

「え！？ほんとですかあ〜？やったあ〜！いつてきまあ〜す〜！」

「猿か犬だなあれは」

「だね」

教室中に響く笑い声。あたりは夕日が明るく照らしている。窓から見える太陽がなんだか眩しい。

「三田市かあ〜どんなところなんだろうな」

「さあーねえー行ってみんとわからんわ」

「龍君はどんなところだと思いますかあ？」

俺は少し考えた。願わくば平和な所であつてほしい。今まで行ったところはひどく荒んでいたりした場所のほうが多かった。もちろん平和な所もあつただけけれど

「住民全員がもれなく幸せに…」

「無理やね。」

「理想持ちすぎですね」

「お前らそこまで言わんくてもいいだろ」

美菜と羅衣にかなり否定された。確かに無理だ。今の時代：あ、いつの時代でもか。全員が平和に暮らしている町なぞあるわけがない。あつたら是非訪れてみたいものだ。

「先生連れてきましたよぉ〜っと」

「はい、おつかれーバナナあげる」

「やったぁ〜っ！」

鴨井はバナナが投げられた方向に向かって走る。先生はそれに呆れつつ席にすわる。

「で。決まったことは？」

「あ、これです。今日は1時間半という短い時間で決まりましたよ新記録ですね」

「んな記録いらないわ」

顧問の先生は担任の先生とは正反対の女性だ。

すらりと背はたくくてどこか落ち着いている。だけれどおもしろいというギャップももっているのだ。そもそも普通の先生がこの部の顧問などできるわけがないから当たり前というべきなのだが…

「ふむ。いいんじゃないか？わたしはあまり干渉しないので、楽しんでこい」

「ええっ！？先生はこないんですか！？」

「わたしは忙しいのでな。」

そういうと顧問の先生は教室から去って行った。鴨井はバナナを食べている。みんな啞然。

そんな中平然とバナナをただ食べているあいつは勇者だ。

「ああー…というわけで、顧問は来ないそうだ」

「ええ、先生の面白い話聞ける思つて楽しみにしとつたのにいー」

そう。毎回顧問の先生は俺達にもしろい話を聞かせてくれる。ああ、ただたまに残酷な話があるけれど…

それを楽しみにしている部員も少なくはない。というかほぼ全員だ。

「ふえ？顧問の先生こないんですかあーん？」

「やつと食べ終わったのかよ。そうだよー残念でしたね鴨井」

「ほんとですよー僕は先生の話を聞くために生まれてきたんすからあー」

「それはさておきー向こうで驚きの連続だと思うがぁー平常心でいろよーみんな」

俺は鴨井をあしらう。一々かまっていたらきりがないからな。

「それどういうこと？」

「まあ、そのうちわかるさ」

美菜をはじめとするみんなは何なにがなんだかわからない様子だ。バルンとアヤナは無論どういう意味か知っている。

「はいじゃあ本日はこれで解散！あさつては渋谷駅西口前に忘れず来いよー忘れないと思うけど」

この日の部活は終了。俺は美菜と蘭と一緒に帰った。鴨井と羅衣は逆方向なのでうるさいやつとは今日はお別れ。まあもう一人、いや一つうるさいのはいるのだけれどそれは気にしないということにし

ておこう。

「ただいま。…て誰もいないのだけれど」

俺はそうつぶやき家に入った。久しぶり似学校に行ったので疲れた。だからもう寝ることにした。お腹もすいていないからご飯を食べる必要はない。最近はネットの世界にも足を踏み入れてないのでなにもパソコンをつけることもないし。

「おやすみなさい。」

そうつぶやいてすぐ俺は深い眠りについた。

3章「旅行部」(後書き)

はいよー

今は4をかいてますよ

旅行部ww

そんなのあったらいいのにww

この部活の雰囲気は

僕が行ってる部活に似てるんですよ

てか僕が行ってる部活を参考にしました

あの部活も変な部活です

この旅行部と同じくらいに

4章「旅行ですよ」

4章「旅行ですよ」

さて、今は何時だろう。なんだか長い間眠っていた気がする…が、そんなことはよいのだ。旅行の準備を整えなくてはならない。

ちよつと待てよ、俺今寝てるの？起きてるの？意識はあるのに寝ているようだ

「りゅうりゅうーうー？」

声が聞こえる。美菜の声だろう。ああ、でも真っ暗だ…

「起きろおっ！」

「いてっ！」

俺は美菜のチョップにより強制的に現実へと引き戻された。窓の方を見ると朝日が眩しいとは言えず、天気予報は晴れだったのになと思いつながら時計を見る。

するともうお昼の3時…まあ夕方だが。

「ふえ！？もうこんな時間！？ちよつ！やばいつ！買い物行かないきゃーっ」

俺は途中転げながら大慌てで階段を駆け下り、さすがにお腹すいているので置いてあったおにぎりを犬が餌を食べるようにほおばり、着替えを済ました。

「もう…何度起こしても起きひんから奥の手使っちゃったやんかあゝ」

「奥の手ってあれかよ」

「そつ」怒りの鉄槌美菜チョップ」

どこが怒りの鉄槌？マンガの読みすぎじゃないか？

「私は龍が起きるまで買い物ずーーーーーっと我慢してたんだからね？感謝しなさいよ」

「ごめんな。よし、じゃあ行きますか」

俺らは一通り準備ができたので近くのデパートに向かった。途中バルンが吠えたので何回か殴ってやった。もちろん自分の手も痛いから自滅行為である。

「まず何買う？」

「そうやねえ…あ！カメラの電池！」

美菜は言うतすぐさま電気屋に向かって行く
それを俺は追いかける。

「カメラの電池ねえ…」

今度行くところはカメラ要らないと思うが…

と俺は内心想った。間違ってもそれを口に出したりはしない。

「あれや。あれえー…えーとー。あれにいるんよ」

「活動報告やらレポート？」

「そうそう、それぞれ！」

美菜はカメラの電池を数個買いだめした。

次は日用品。まあこの場合は旅行用携帯歯ブラシとかそこらへんだろ。

「歯ブラシと…あ！この棒付き飴ホルダー！」

「それって日用品かよ。なんでそんなもんが日用品売り場にあるんですかあ？」

俺はその棒付き飴ホルダーに対して突っ込んだ。ほんとにわけがわからない。なんでこんな物が日用品・雑貨売り場に売っているのだろうか

「ねえこんくらいでいい？買うの。」

「ああーいいんじゃない？他のもんはたいてい家にそろってるだろうしさ」

「そつか。じゃあそろそろ行こつか」

「うん。行くかあゝ。今日も早くねるぞ」

「ねえっ！今日はさあゝ一緒に寝よう？」

美菜が俺の腕にしがみつきながら言う。なんというか、こいつはとんがっている時が多いのにこういうときもあるもんだからちよっと困る。

「んー。いいよ。今日は一緒に寝るか」

「龍一さんよゝどという風の吹きだまりだい！？」

「吹きまわしだろ」

バルンは人間の言葉にうとい。熟語なんて間違えまくりだ。

俺らは笑いながら家に帰る。バルンと美菜がずっとボケっぱなしだったから突っ込み側としては少し疲れたけど、それもよかった。

俺らはパジャマに着替えてすぐベッドに入った。

「三田…か…しかも…」

俺はいやな予感が少しだけした。

「さてと、そろそろ行かないと待ち合わせに間に合わないよ」
「わかつとるよーっ！ちよいと待ってて」

今日は旅行部の旅行の日。行き先は兵庫県の三田市。美菜は少し準備が長引いている。まったく何をしているのだろうか。
さしずめ水月の手入れでもしているのだろう。

数分後美菜は部屋から出てきた。

「お待たせっ！早くいこっ！」

「準備遅れたやつが言うセリフですかあ？それは」

俺はドアを開ける。朝の日差しが眩しい。やっぱり目は最初は慣れない。

渋谷駅西口は俺の家からありえないほど近い。あっという間につく。
俺達は少し早歩きで歩いていた。

「三田かあゝ楽しみやなあー」

「お前、行ったことないの？」

「私は関西人やったけどさあゝ三田って昔なにもなかったんよね
！。だから行かんかったんよ」

「何もなかった…かあゝ。じゃあなんで楽しみなのさ」

「それはあ…」

美菜は少し考えている。俺も気になるので黙って待つ。

「それはねえ、私はあー最近噂のDOTSとかマリオネッツっていうグループのこと知りたいからだよ」

俺は一瞬だけほんの一瞬だけ固まった。

少し戸惑っているうちに、みんなと合流した。
正直助かった。

「龍くん、美菜ちゃん！こつちだよー」

「あつ！蘭ーっ！お待たせーっ！」

美菜はあたりを見渡す。

「やっぱり先生は来とらんみたいやねー」

「そうだなあ、残念」

美菜は浅いため息をついた。

俺はみんなを先導して駅に入る。切符を買って改札をぐぐり、電車に乗る。

「どれくらい時間かかるんですかあ」

「んーつとなあここからだと2時間くらいかな」

「意外とかかるもんですねえ」

「そうだねそれまでひまだねえ」

蘭はすこしため息をついた。確かに2時間も電車の中で揺られるのはひまでたいくつでいやだろう。

ガタゴトと揺れる電車の中でもう10分近くは経過しているだろう

か。そしてなぜかこの時電車には俺達しか乗っていない。どういうことなのだろうか。

「んーなんだろうね、なんで人がいないんだろうね。普通はいっぱいいるはずなのに」

「まさかとは思うけど、運転手もいないとかいうのはやめてくれよ…?」

「ははは・・・まさかそれはないんじゃないすか?」

「ちよつと他の車両見てくるかな」

俺は席から立ち上がり、揺れる車内を探索することにした。他の車両には人がいるかもしれないし…まあその気配はないんだけどね
2車両目…いない。

3車両目…いない。

最後の車両…いない。

「どうということ…?ほんとに人がいないなんて…ははは…運転手は大丈夫だよな…」

運転手席に向かう。この車両からはかなり近いのですぐだ。揺れる電車の中を歩き、スライド式ドアを開けて車掌室に入る。

…いない

「おいおい…これはどういう冗談だ…?」

「龍一、こりゃあ一体どういうこつた!??」

「それは俺が聞きたいねバルン」

俺は驚きのあまり、ただ突っ立っていた。目の前の操縦桿や、ボタ

ンの数々をただぼーっと眺めている。

「ひよつとしてどこかに全員拉致されてたりしてな！」

「まさか…ん…？いや待てよ…確か電車に乗る前は人がいたはずなんだ…うん。ということは、確かにどこかに拉致されてたりする可能性もあるな。」

「ほおらな！ーじゃあとりあえず電車の中をもっと詳しく探ってみようぜ！」

「そうだな…こういうのはだいたい…電車の上に居たりするものだよね経験的には」

俺は上につながる梯子がないか調べる。こういう梯子というものは車掌室にあつたらベターでよい。

「龍一さんよお！お前つてしょっちゅうこういう怪奇事件に巻き込まれるよな！」

「俺だつてまきこまれてくてまきこまれているわけじゃないんだけどな。」

俺は車掌室をくまなく調べる。梯子以外にも何か気になるものがないか。

「ふゝ…梯子はないのかな…」

「ん…？これなんだろう…」

俺は床に落ちているなにかを拾い上げる。

それは薄っぺらく、カードのようなものだ。

おそらく名刺かなんだろう。写真と名前等が載っている。

「んー…あ、これ電車運転手って書いてあるよ。運転手さんが落

としたんだろうね」

「んーつうことはだ！確かにここに居たってことだよな！」

バルンの声はこういうときでも大きい。いつ何時でも元気なのがこいつなのだ。

第一だ、そんなことは言われなくてもわかっている。わざわざ説明臭く言うことないだろうに。

「んー…どこに居るんだろうなあ…」

俺は天井を仰いだ。天井を仰ぐというのは変な表現なのだろうけれど、それがしっくりくる。すると、スライド式の扉的な何かを見つけた。

「これひょっとしたら開いたりして、そして上につながってしまったりしてな」

それはちよつとベターだなと思いつながら、でもそれがいいのかもと思いつながら開けてみる。

「見事に開いたなあーしかも上に出れたようだし」

走っている電車の上は風がものすごい勢いで

吹きぬけていき、とても危ない。

俺は少し見渡した。すると、数人人が固まっているのが見えた。家族らしき人たちと、運転手が固まっておびえている様子だ。

その周囲には黒ずくめで明らか不審者というようないでたちの人が3人いた。おそらく脅されているのだろう。

「おーい！その黒ずくめーっ！なにをやっているのかなあー？」

俺はそいつらに近づいていった。走っている電車の上を走るという無謀なことをして、そいつらに接近。

「ちっ……ほかに客がいたか……」

「き、君っ！ここは危ないから早く逃げなさいっ！」

「それはこっちのセリフなんすけどね。」

俺は不審者に殴りかかる。不審者の一人は、たいしてよけることもせず（パンチが速くてよけれなかったのだろうが）電車のしたに転がり落ちた。

「さあてと、お前もこうなりたい？ほらあ、この電車今走ってるでしょ？落ちたら、大けがどころじゃ済まないかもよ？」

俺は、残酷さを増すために笑いながら不審者に詰め寄る。周りの人はポカーンとしている。

俺は、演技とはいえ、こういうのは苦手だ。できればたくない。残酷なのは羅衣だけでいい。

「……構わんっ！やれえいっ！」

不審者が全員俺の方に走ってくる。そのすきに乗客を下に行くように目で合図する。わかるのかどうかわかんないが、おそらくわかるだろう。——わかってくれたようだ。みんな逃げていく。

一人殴りかかってきた。俺はそれをよけて、鳩尾に一発いれる。

「さあ、誰からでもいいよ？かかってきな？ただし、この俺秋沢龍一にかてるものならね」

「秋沢……龍一だって!？」

「なに、お前ら俺のことしってんの？光栄だねー俺も有名だとは俺は少しおどけてみる。なんでこいつらが俺のことを知っているんだろう。」

「秋沢さん、DOTSに戻る気はないですか？」

D O T S…なんでこいつらが…ああ、そうか。

「DOTS？なんだそりゃ。んなもん知りませんよ」

「そんなはずはありません。三田市主体のチーム・DOTSはあなたがつく・・・」

俺は喋っているやつの腹に一発殴った。

「人違いだ。わかつたら消えろ。今なら見逃してやるから」

俺はこつこつと電車の上を歩き、したにもどる。下には乗客と運転手が居て、ものすごく歓迎してくれた。礼を言われ続けて、ちよつと照れくさい。それにしてもさっきのノットという単語…気になる。

「どうもどうもー無事でなによりです。それより、ちゃんと進むべき道に進んでます？この電車」

「はい、大丈夫です！」

運転手は歩いていく俺の背中に敬礼をする。もちろん俺は見えていないけれど。

敬礼してくれた気がした。

「もう！なんで一人で突っ走っちゃうのよっ！」
美菜だ。

「いやあゝわりいわりいついね」

「心配したよ？みんな龍くん帰ってくるの遅いねって」

「美菜も、蘭も、みんなもごめんな。さて、結構時間たつたし。もうそろそろつくんじゃないか？」

俺は話をそらす。都合の悪いこととなると話をそらすのが俺の悪い癖だ。わかっていても、治らない。

「あー三田ってどんなところだろー」

棒読みだ。

「もうっ！龍くん？そんな明らかに話逸らさないでよおっ」

蘭が腕をたたいてくる。みんなはそれを見て笑う。笑いがとれたのならよかったと俺は思う。

「いやあゝそれにしてもすごかったらしいっすねえゝ先輩の残酷さで不審者を怖気つかせたようっで」

「人聞き悪いなーあれ、演技だから。おれが残酷なことしたり言うわけないだろ本心から。羅衣じゃないんだし」

「なんで私が出てくるんですか？私別に残酷じゃないですよ？」

「あ、気付いてないのね。うん、いいんだよ。うん。残酷でも友達いるんだからいいんだよ」

「何子供を慰める？みたいに言ってるんですえすか。その喉つぶしましょうか？」

「だからそこが残酷なんだ」

「えー終電ー三田ー三田ーお降りの際はー」

足元に十分ご注意くださいー

「何か言いました？」

「さあーてー降りるぞー」

わざとらしく俺はあしらうと足早に電車を降りる。降りるときに乗客全員と、運転手に敬礼されたから僕は軽く会釈した。

「ごまかさないでくださいっ！」

羅衣が俺に軽い蹴りをいれる。

「一応先輩なんだからさ…！こういう…いつつ…蹴りとかやめような？な？」

「今のはね、龍くんが悪いよ」

「そうそう」

「そうっすね」

「…ごめん。」

「ぶふっ…！あははははは…！」

羅衣が笑いだす。俺はこの笑い方が苦手だ。

この子はあまり笑わない。だけど笑ったらかなかなか止まらない。しかも笑い方が…まるで世界終末直前のように狂って笑うのだ。

世界終末直前を目の前にして、人はこんな風に笑うのだろう。はあ……
ため息をつきながらも、駅を後にする。それからしばらく町を歩いていると壁にある羅気学を見つけた。

「DOTS推参！だつてさ。なんだろこれ」

「チンピラじゃないすかぁー？」

「さあな、知らんし興味もないよ俺は」

「んーなんか気になるねんなぁーこれ」

「いいから、早くホテルに行くぞ。今回は結構高いところなんだから、粗相のないようにね」

「はあーい……一応写真とつとこ……」

美佳は、この時俺に気づかれないようにぱしりとシャッターを押した。フラッシュは出なかったので、全く気付かなかった。

「美菜、早く来いよーおいてくぞー」

「あつ！ちよい待ちっ！」

美菜はこちらに走ってくる。そして、みんなッそろってホテルに向かって歩く。ホテルはここからすぐだそうだ。

「ああーホテルにいー緑色のツインテールでエメラルドグリーン
の瞳の妹系キャラメイドさんはいないもんすかねー」

「ああ、それ何言ってるかわかった。わかってしまう俺も俺だなあ……
いてか、いるわけないだろそんなの」

「意外と……いるかもしれませんよー？。いいじゃんかぁー。妄想
くらい膨らませてやったらいいじゃない」。――

「蘭、珍しいなこいつの肩を持つとはさ。腐女子伝説は、本当だつたりしてな」

「龍くん？」

「冗談だよ！冗談！―ああ…怖いなあ―…」

「ん？なんか言つた？」

「言つてないっ！言つてません。――あ、あれホテルじゃないか？」

俺は目の前の豪華絢爛な出で立ちの建物を指差す。看板にHOT ELと書いてある。

庭はものすごく広くて、緑豊か。いろいろな花が咲き誇り、堂々と真ん中に噴水が位置している。昼の日差しが噴水に反射してなんとも言えない鮮やかさを映し出している。

「うつわあゝっ！あれ？ねえあれ？あれなに？」

「何度も聞くなよ。たぶんこれだろうなあ」

「すごいっすねえーほんとにさっき言つてたメイドさんがいそうっすねー蘭先輩っ」

「そ、そうね…ってなんで私にふるの！」

「えゝだつてえーふじよs…ぐばっ！」

「お前らなあー少しは静かにしろよ。中に入ったらくれぐれもお静かに」

「はあゝい」

「じゃあ入るぞ。繰り返すけど粗相のないように」

俺達は、立派な庭を通りぬけて横びらき。まあスライド式ドアの中に入つていった。そこは、あまりにも豪華で言葉も出ないほどだっ

た。赤いじゅうたんが敷き詰められていて、天井にはシャンデリアがつりさげられている。そして立派な階段。立派なカウンター。立派な椅子、机。どれをとっても素晴らしい。

「うわぁ…きれえ〜い」

「ほんとだねえ〜私たちこんなところに泊るんだねえ〜過去最高のホテルじゃん〜っ」

「じゃあ、俺手続きしてくっから」

「うわぁ…」

いつまでも目を輝かしている二人を置いて俺と後輩達はチェックインをしにカウンターに行った。

「あの、予約していた世界剣銃協会所属高等学校旅行部ですが―」

「あ、はい。5名様ですよね？かしこまりました。お部屋は、草の間と森の間となっております。ご自由にお使ください。こちら、部屋のカギとなっております。」

「はい。ありがとうございます。」

「ああ、そうそうお話聞いていると思うけど俺のこと特別扱いしないでくださいね。お願いしますよ。こいつらのことも、うるさかったら注意してやってください〜」

「わかりました。では、〇〇を楽しんでくださいね〜」

「ありがとうございます〜」

「なにしてんすかぁー？早く行きましょーうよー」

「ああ、ごめんごめん。今行くから」

「じゃ、くれぐれも〜」

俺は受付嬢にぐッポーズをして、みんなのところに戻った。

「なにしてたんすかぁ？受付嬢ナンパしてたんすかぁ？」

「そんなんじゃないって。ナンパなんてするわけないだろ」

「じゃあ何してたんすかぁ？」

「ちよつと部屋のこと聞いてただけ」

「ふゝんおもしろくないっすねえゝん」

俺らは階段を上がり、3階の草の間と森の間を見つけた。

「じゃあ部屋割は当初の予定通り。じゃあ一次解散」

「わぁゝい」

「美菜！走るな！」

「たく……」

俺は森の間の畳に胡坐をかいてため息をついた。部屋のやつは鴨井。女子は女子で、男子は男子の部屋。森の間は狭いから二人くらいがちよつどよいのだ。森の間は、かなり和風で俺にとっては過ごしやすい。あの外見から洋室ばかりと思っていたけど、和室があつて安心した。やつぱり和室が一番いい。

「秋沢先輩いゝこれ見てくださいよーこの新聞なんですけど」

「ん？お前が新聞読むなんて珍しいな。明日は嵐か？」

「おれだつて新聞くらい読むっすよーそれより、これさっき壁に書いてた“DOTS”ってのが書いてますよ」

「ああー。あれね。ちょっと見して」

「あ、はい。どうぞー」

俺は新聞に目をやった。すると、“CFO組織DOTS!”と大きく見出しが書いている。しかも、この記事は一面だ。

内容を見ると、CFO組織（子供の自由な組織）であるDOTSが勢力を伸ばしてきている。渋谷にまで会員を増やし始めた。創始者は現在失踪中等々…

「ふーん。CFO組織ねえ…渋谷にもいっぱいいるよな」

「そうっすねえーまあ、別に害はないんすからいいんすけどねー」
「まあな。だけど犯罪に手を染めるところもあるらしいぞ」

「そうなんすかあー。でもやっぱりなにかないと面白みがないですよねーたとえばあー大勢を率いて闇企業に立ち向かうとかあー」

「お前やつぱり小説の読みすぎ。それが、アニメ飲みすぎ、マンガのよみすぎ」

「先輩だって人のこと言えないじゃないすかあー雷撃文庫いっぱいもってる癖にいー」

「いいじゃんよ。別に俺はお前みたいに2次元と3次元の区別がつかないような人間じゃないの」

「2次元と3次元の区別くらいついてますよっ！むしろわかった上で、僕は2次元を選んでるんすよー」

「ああ、お前やつぱりバカだわ」
「ふたりともーっ！そろそろ出かける時間やなかった？」

美菜が部屋に入ってきた。俺らは、あわてて鞆をもって外にでる。受付がどうのこうのうるさかったけどすべて拒否させてもらった。

「さあてと、どこ見る？歴史博物館もあるし、図書館も2つほど。こつからだったら、歴史博物館が近いな」

「なんでそんなに詳しいん？」

「ガイドブックみたからだよ」

「ふーん。それじゃあ案内頼むわあー。じゃあさあ歴史博物館だね。まずは」

「うん。そのあとは、自由にしていーぞー」

「やったあーっ！」

「歴史博物館で勉強済みました後はあー三田市限定発売のあのかつこいいリストバンドかうんすよねーいん」

「リストバンド？」

俺らは歩きながら喋っている。三田の町並はいたって普通。だけど結構発達しているほうなのだろうか。店もいっぱいある。自然もあり、便利でとてもいい街だ。

「そうっすよーリストバンドっすーガイドブックに載ってたんすよねー」

「ふーん。俺も見してみようかな」

「ああ、それにしてもさあー三田っていい街やねー感激しちゃったあー」

「まあ、そうだなあーいい街だ。ここは」

「あつ喋ってる間に歴史博物館についたみたいだよー」

蘭が指差した先にはザ・博物館のような建物が建っている。Historyと看板に書いている。

「うん。あれだな。じゃー入るぞー」

「三田の歴史ってどんなのなんすかねー」

「まあ、これでわかるよ。ちゃんと聞いとけよ?」

ここのドアはスライド式ではなく、外開きのドアだった。それを開けると、案内人のような人が建っていて、内装は暗い感じになっている。博物館なのだから、暗いほうがいいのだろう。博物館は別段広いわけではなく、モニターと椅子が数個あつたくらいだった。映像で見る歴史というやつなのだろう。

「こんにちは。見学したいのですが…」

「あ、あなたは…いえ、なんでもありません。どうぞこちらへ」

「今、なんて言おうとしたの?」

「いえ、特になんでも」

「こちらへお座りください。本館は、すべて映像と私の説明で歴史を説明させていただく形となっております。」

「やっぱり映像なんだなあー」

「まあいろんな品々みるよりは映像のがわかりやすいって」

「では、そろそろ始めます。」

あたりが一気に暗くなり、モニターに映像が映し出される。

昔、三田は摂津の国と呼ばれていました。そして、三田藩のちに呼ばれるようになり
今の三田市となりました。そして、昔からここは自然がとても豊かで
のどかな場所でした。

ですが、繰り返される戦争。戦火の中で自然は焼かれ、ここは荒地
になりました。第3次世界大戦時にはもう修復不可能な状態にまで
追いやられていたのです。

それがどうやってここまで来たのか？それは、一人の旅人のおかげ
でした。その旅人はこの荒地を見て戦争を思い出し、こんなことが
あつてはならないともう二度と繰り返してはいけないとここにいく
つもの種を植えました。

そしてそれは序序に芽吹き始め、数年後には自然をある程度まで取
り戻したのです。そしてその旅人は大変お金持ちだったのでこの土
地を購入し、いろいろな施設を建て、人を呼び戻し街は再興の方向

に動き始めました。ところが…再興とともにこれはつい最近ですが、とある怪奇事件が起こり始めたのです。

学生による大量殺戮事件。

それが、ただの殺戮事件ではなかったのです。

世界で話題になったあのスリーピーリッパ事件です。

事件を起こした学生たちの目はうつろで、人間離れした動きでした。

そして、生氣などもなく催眠状態に近い状態だったので催眠殺人と呼ばれるています。

その学生たちは大量に市民を殺しました。そして、人口が大量に減ったのです。

そして、その事件を収束したのもまた学生でした。

その学生たちは自らをDOTSと名乗りました。そして、事件を起こした学生全員の催眠をときました。

そして、その後そのノットのリーダーはあの旅人の子供と言うことが分かりました。

そして旅人は政治家になり、全世界に存在が認められ総理大臣とな

りました。

そしてノットの登場により、CFO組織が確立しました。今日本中で話題のCFO組織の発生はここ三田というわけです。そして、総理大臣の支援を受けてこの三田は今のすばらしい状態を保っているのです。以上近代史でした。

「お疲れさまでした。これで見学はすべて終了とさせていただきます。」

映像が消え、ゆっくりと電気がつけられる。
電気がついても、まだ若干暗い。

「ああ、疲れたっすねえー」

「そうだなあー。お前ちゃんとさっきの話保存してたか？」

「してたっすよー。パソコンのキーボードの音を最小限に抑えてたんすからあー」

「それならいいけどな。またおれだけしかやってないってことになったらどうしようかと」

「そんなときはあーりゅうのを使って新聞作るだけだよ。うん。」

俺はため息をついた。博物館を出て、広い大通りを歩きながら、鴨井の言っていたリストバンドを売っているというお店を探す。

時間はすっかり夕方になっていて、オレンジ色の光が優しく包んでくれる感じがした。お店がいっぱいあって、ここはおもしろそうだ。今日はここで買い物をすることにしよう。

「じゃあ、今日はここで買い物していいぞ。じゃあ、一旦解散。ホテル集合な」

俺は美菜と鴨井と行動することになった。鴨井は、リストバンドを見ればそれでいいらしくそれを先に行って、そしたらすぐホテルに戻るそうだ。

「リストバンドねーそんなもん売ってるのは…ここらへんだったらあ。ジータイって店だな。」

「ジータイ？」

「ああなんの略かはしらないけど、若者に人気でいろんなものが売っているらしいよ。三田限定のもいっぱい売ってる。」

「へえーそなんすかあー。変な名前ですね」

「言うな。失礼」

「そうやで、失礼やでー鴨井」

「すんませ〜ん」

「誤る気ないね」

「そうだな」

俺は見渡して、それらしい店がないか調べる。すると、一つだけ周りのお店とちがう雰囲気の良い感じのお店があった。近づいて看板

を見ると、『ジータイム』と書いてあった。

「これじゃないか？」

「んー看板的にここっばいね」

「入ってみましようよ」

「うん。入ってみよう」

入ると、カランカランと懐かしい音がした。

カウンターには感じのよさそうなお姉さんが座っていて、内装は結構新しかった。

「いらっしやいませー」

「ちよつと見させてもらいますね」

「リストバンドーリストバンドー」

鴨井がガイドブックを見ながら、つぶやいている。そして、店内を探しまわっている。

「あ！これですよー先輩いー」

「ん？ああーこれ？」

鴨井が指したそれは赤いリストバンドに黒い髑髏がデザインされている。結構デザインはいい。でも、これは…

「値段はあゝっと…安いっ！300円すよっ！お得っすよー！」

「じゃあ、レジもっていけよー俺はもう少し店内見とく。」

「言われなくても」

鴨井は猛ダッシュでレジにリストバンドを持って行った。

「世話しないねえ」鴨井は。」

「ほんとだね。さてと、お土産みようよ。美菜」

「うんっ！もちろん、二人で…だよな？」

「もちろんだよー俺も疲れてるからさ、二人がいいし」

「とりあえずこのお店もうちよつと見ようよ！」

「おっけい」

俺達は、鴨井が出て行ったので心おきなく買い物を楽しむことにした。今の時間は6時。食事は8時。まだ時間はある。お店にはかわい免税品、かつこいい免税品。いっぱいある。多種多様。

「これかわい！ーペアネックレスだっ」

美菜がかけられているペアのネックレスを指差して言う。

「ペアかあーこれ、買う？」

「うんっ！」

「じゃあこれまず決定ね」

「二人でつけようね」

「うん。じゃあ、俺はこのネックレスともう一つ、しおり買っていくかな。」

俺はペアネックレスとそのしおりをレジに通す。ネックレスは、ハート型の半分ずつ。しおりは、真ん中に六方星が書いてあるだけのシンプルなつくり。

「はい、これ美菜の分な。」

「ねえ、つけてよっ!」

「ん。…いいよ」

「やったあっ!」

俺は美菜の後ろ首に両手を回し、ネックレスをつける。美菜の胸元にそれがよく映えて、すごくかわいい。

「どう?似合ってる?」

「うん。すごく似合つと…思うよ?」

俺は照れ隠しに時計を見てみた。すると、針は6時30分を指している。

「美菜あ、そろそろ帰ろうか」

「ああ〜うんっ!ホテルに帰ったらご飯やねーっおいしいんだろ
うね〜」

「そりゃあ、あんな豪華絢爛な外装アンド内装なんだ。おいしくないはずはないよ」

店を出る。カランカランという懐かしい音。ホテルに向かって歩く。地面は夕焼けの赤に染まっている。舗装された地面の音をこつこつと音を立てながら二人で手をつないで歩く。恥ずかしい。でも、幸せだ。

「さてと〜明日は、全員で街でも散策すっかな。な、美菜?」

「うんっそだねー気になることもあるし。」

「気になること?」

「ああー、うん。ちよっとね〜」

美菜はわざとらしく頬笑みながらこちらをうかがう。俺は、気になつてはいたがそれほどに追及することはなかった。

「遅いつすよっ先輩いー」

「ああ、わりいわりいー。」

「みんな戻つてゐるつすよー早くご飯たべましょー」

「そうだね。行こう、りゅう」

「うん。そうだな」

俺らはホテルにつき、荷物を持ったまま、食堂にあつまる。食事はいたつて豪華。

牛肉のクリームシチューに、名産の白いご飯。

カルボナーラに、パン。今の時代。この上ないくらいに豪華だ。このホテルは、どこまで豊かなのだらうと俺は疑問を抱えながらも、いただきますとあいさつをする。そして一口。シチューを口に運ぶ。「うまい。」まさに、その一言だった。

みんな一様に料理を口に運んで、うまい。その一言。あとは黙々と食べ進めていった。

そう、始終無言で。

「ごちそうさまでした。」

みんな、すぐに食べ終えた。皿には綺麗に食べつくされて何も残っていない。

「どれもこれもおいしかったです。ありがとうございます」
「どういたしまして。」

俺は、一礼するとすぐに部屋に戻った。

明日は、散策。「DOTSのやつらが出てこなければいいが・・・」

そんな独り言を漏らしながら、布団に横になりながら携帯をいじっている。すると、鴨井も帰ってきた。鴨井は、布団の上に座ると、先刻のリストバンドをつけてにやけている。

「先輩いー誰とメールしてんすかー？」

「いいじゃねーか。誰でも。」

「まさか、浮気つすかぁー？いけないすねー。美菜先輩というかわいい彼女さんがいるのにー」

「なわけないだろ。昔の友達にね。メールしてたんだよ。」

「昔の友達ねえー。それは、男ですか女ですか？」

「お前、わかって聞いているだろ...？女友達だ。」俺は文字を打ちながら答える。

「なんのことっすかねー」

「とぼけんな」

「ほらほらー先輩、そろそろ消灯時刻じゃないすかー？」

「...ごまかすなっ」

「おやすみなさいー」

鴨井はその瞬間。一瞬にして寝てしまった。

「早すぎるだろ。おやすみ言ってから寝るまで。
俺はため息を少しつくと、布団をかぶった。」

4章「旅行ですよ」（後書き）

久しぶりの更新ですね笑

さてと、次から話が動きます。やっとです。
前振りはこれでおしまい

まずは 秋沢 龍一の話。

これが終われば、すこしはしやすめに
学校の話しをいれようかと

まあー

ネタばれはそこそこにしといてと笑

最近いろんな小説を読むようになりました

電撃がほとんどですが笑

最近忙しくてあんまりこのサイトの小説よめてないなあ

ごめんなさいね

また、まとめてよんどきます

ではっ！次回をお楽しみに

5章 「それぞれの日常・a」

「それぞれの日常・a」

朝。柔らかな日差しが体を包むころあい。俺は、まだ寝ていた。

「たく、仕方ないね。たたき起そう。いくよ、蘭」

「うんっ！」

「せえーのっ！」

「起きろおーっ！朝だぞーっ！」

そんな柔らかな朝のイメージとは裏腹に。俺秋沢龍一は、二人の女子にたたき起された。

「ん…今何時？」

「8時30分。予定より20分オーバーや」

「……やっべっ！」

俺は急いで跳びあがり、女子二人を部屋の外で待たせ、着替えを済まして荷物を持つ。そして、部屋を出た。

廊下には美菜、蘭、鴨井、羅衣。全員集合していた。

「たく、早く起きなさいよね。いつもいつも遅いんやから」

「ごめん。ついついさー寝てしまっんだよ」

俺らは朝ごはんを済ませるべく、食堂へと向かう。食堂はかなり近いほうで、すぐ着いた。

テーブルの上には、ザ・朝食・豪華版と言った感じの料理が並べられている。クロワッサンに、コンスープ。ウインナーにスクランブルエッグ。どれもこれも、合成食材なんかじゃない本物。

「うわぁー…すごい。早く食べようよーっ」

「そうだね。では、」

——いただきます——

やはりみんな始終無言で食べている。

俺も、無言で夢中になって食べた。

どれをとっても、素晴らしくおいしくてやみつきになる。

こんな素晴らしい宿とも今日でお別れだ。何故なら今日観光したら、帰る予定だからだ。なんと名残惜しい。

——ごちそうさまでした——

「おいしかったねえ、朝ごはんも」

「そうだねー」

俺らは、食堂を出た。

「じゃ、チェックアウトしてくる」

「よろしくー」

俺は受付まで行って、チェックアウトを済ますべく受付嬢に話しかけた。

「あの、チェックアウトお願いします」

「はい。かしこまりました」

「どうでした？三田。だいぶ変わっていて驚いたでしょう？」

「そうですね。びっくりしました。とてもいいところです。」
「じゃ。ありがとうございます。お世話になりました」

俺はそそくさとホテルを出て行った。みんなはそれに続く。そして、今日の目的は市内観光。みんなで、ぶらぶらと歩きだした。

「さてと、適当にぶらつきますか。」

「そうやねー。いいお店があったら、立ち寄ろうよ」

朝の日差しは、やっぱり柔らかく。心地よい風が吹いていて気持ちよかった。今の時代には珍しい自然を堪能しながら、ぶらぶらと歩いている。その時。

「おい、そこのお姉ちゃん達いちよいと金かせや」

「は？」

俺は思わずそうつぶやいてしまった。見るからに不良。と言った格好で、手にはちゃかを持っている。何故今やーさん風に言ったかというと、相手がそういった感じだからだ。

「ああ？なんだ、その態度は？金かせつつてんだよ。早くしねーと、この子のどたまあぶちぬくぞっ」

そいつらは、あろうことか美菜の首をつかみ、こめかみに銃をつきつけた。

「お前らなあ…丸腰の女の子相手に銃だすたあ。いい度胸してるじゃねーか。」

俺はバルンを一気に引き抜き、相手が持っている銃に向けて撃った。一瞬の動きで、相手はあつげにとられている。その間にも銃は弾き飛ばされ、美菜は肘鉄をそいつに食らわし、逃げた。すると、そいつは携帯を取り出し

「ああ。俺だあ。ちよつとこつちきてくんねーかなあ。…ああ、20人ほどだ。」

「今から一瞬で俺の部下どもがここに来る、おとなしくすることなつ。…よくも銃を撃ってくれたじゃねーか」

「ん？部下。なんかの組織か？」

薄々感づいてはいたが、説明臭く聞いてみた。

「ああ？俺らのことしらねえのかあ？お前らあ。DOTSといやあ、誰でも知ってるんだがなあ」

「また、DOTSか。」

そう吐き捨てた刹那。周りから大勢獲物をもった人々が来た。おそろく、いや確実に。こいつの部下だろう。

「よくもまあ、ぞろぞろと。しかも、獲物持ってやがってるし…て、今日本語変だったな…んなことはどうでもいいんだ。お前ら、やるの？おれと？」

「やめといたほうがいいすよー。この人、こう見えて結構強い

っすからあー」

「私も、やりますよ。」

「羅衣、お前いつでもその鎖鎌もってんのか！危なくねーかつ？
てか、持ち歩きにくいだろっ！」

「危なさに関しては、先輩には言われたくありません。先輩だつて、いつも銃持つてるじゃないですか」

「何ごちゃごちゃやってんだよあ」

「俺達の先輩をやってくれたらしいじゃねーかあ！なら、おとしまえくらいはつけてもらわねーとなあ」

「やったっていうか、銃はじき飛ばしただけなんすけどね」

俺は呆れを含めた笑みを浮かべる。

すると、向こうはこっちめがけて走ってきた。

「さてと。ゴム弾。装填。いっちょいきますか。羅衣、暴れていいぞー」

「了解。」

その刹那、羅衣は鎖鎌を取り出し、相手の武器めがけて投げた。すると、鎖が上手い具合に絡みつき、ひよいひよいと敵から武器を奪っていく。その感に、俺も銃で相手を迎え撃つ。ゴムだから、痛いくらいですむので、容赦なく足や手を狙う。

「えぶふあっ！」

「…なんだあいつら、的確につぼを狙ってくるっ！」

「ああ、俺ら？俺らはあ…世界剣銃協会所属高等学校。略してW S G Hの一級生徒だっ！」

1級生徒とは、学年のトップクラス。A Fクラスでいうなら、A

クラスだ。ただ、ある試験に負けると一気にクラスが成り下がり、成り上がり。なのだが。

「…WSGHだと？…あの、軍育成学校か…？」

「なんだそりゃあ？」

「あれっすよ、先輩。日本に6つしかない、政府直属の学校です。」

「ふーん。それ、すごいのか？」

「すごいってもんじゃないすよ。戦闘知識、実績においては敵う人はいません。しかも、そのトップとなると…中途半端な喧嘩集団じゃあ、勝てやしませんよ」

「俺らあ。中途半端な喧嘩集団じゃねえんだけどよ。あいつらあ、確かにやべえな。よし、おめえらあっ！一旦引くぞ！」

——シー——

「シー？何故にイタリア語？」

「さあな。大丈夫か？美菜。」

「う、うん。」

——同時刻・渋谷の某マンション——

「すいませーん。望月さん。いらっしゃいますかー？」

インターホンに問いかけるその女は、スラっとした足。ひきしまったお腹。顔も上の中くらい。世間的に言う“美女”というやつだった。雨が降っており、若干髪は濡れている。

「やあ、威海さん。待ってましたよ」

インターホンの向こうから聞こえてくる声は、若い男性と思しき声

だ。

「なら、早く開けてくれない？」

「わかってますって。今、開けますよ」

マンションの一室の部屋が開く。出てきた男は、インターホンの声の主。外見年齢20歳くらい。さわやかな顔つきの好青年。といった感じだ。

「さあ、あがってあがってえー」

「おじやまします。」

男は、女をソファーに座らして自らはデスクの椅子に座り、問いかける。

「で、威海さん。今回はどんなご用件で？まさか、用事もないのにわざわざ電話かけたりしないですよ？」

「当たり前じゃない。今回は、あなたを有力な情報屋。と見込んでの依頼よ。」

「おおー。これは光栄だあー」

男は、ものすごく軽い口調で言う。

「で、どんな依頼？」

「調べてほしいことがあるの。：最近街に増えてるでしょ？CFO組織。その中でも、DOTSという集団。それと、WSGHのこと。」

「それは、お安い御用だけどー。この前売った情報以外の情報となると、お高くなりますが？」

「それは、わかってるわ。だけど、調べて頂戴。」

「この件は、僕の中でも未知の領域。というやつでね。10万くらいは払ってもらわないとー」

「それでいいわ。10万。」

「商談成立うー」……では、早速調べるからわかったら電話しますよー」

「そ。じゃあ、今日は帰るわ。あと、この件はくれぐれも……内密に。」

「まあ、国家反逆罪に成り得ますからねー僕も慎重に事を運ぶとしますよ」

会話を終えると女はそそくさとマンションを後にした。

——会話終了とほぼ同時刻。三田市・某公園にて。

「さっきの。なんだったんすかねえー」

「DOTS。と言ってたね」

「DOTSって、新聞に載ってた。あと、壁の落書きにも。あつたやんね」

「ん。あんな暴力的な集団じゃあなかったらしいんだけどな。最近暴力的になってしまったらしい。」

「まっ。ええやんー別に。怪我はなかったわけやしっ気を取り直して、観光ー観光ー」

美菜は、自らが被害にあつたというのに、明るく話を切り出した。おもむろに立ち上がり、みんなの肩をぽんぽんと叩いている。

「そうだね。気を取り直して、観光…と行きたいところだけどー。さっきのいざこざの間に、結構時間を食ってしまったみたいだね。そろそろ新幹線のらないといけない時間だよ」

「まじか。じゃあ、駅。いこっか」

「そっすねー。まあ、DOTSのことはーもうどうでもいいっす」
「そうだな。じゃ、行くか」

俺達は昼の街を歩きだした。この公園から、駅まではそう遠くはない。だから、すぐ着く。

歩きながら、街を見ていると先日鴨井が買ったリストバンドをつけた人をよく見かけた。先ほどのDOTSの集団も、皆、一様にあのリストバンドをつけていた。

駅前の壁には、来た時と同じように“DOTS推参”！と文字が描かれている。

駅の入り口をぬけて、改札を抜ける。すると、ジャストタイミングで乗る新幹線が到着。なんと、間がいいことだろう。余裕で俺らはそれに乗車した。乗車して間もなく、みんな寝てしまった。俺も、寝た。

——そして、次の日の午後16時。学校にて——
「えーと、そういえばさあ旅行行ってて忘れてたけど、明日。試

験じゃなかったっけ？」

「あ、ほんとっすねー。戦争試験じゃないですかあー」

戦争試験とは、各クラス学年関係なしに行うテスト。

内容は、この学校のバーチャル空間を作り出し、仮想空間の中で行う戦争。

したがって、仮想空間の中で攻撃を受けても、自分本体には傷がつかない。

というわけだ。だったら、どうやって勝敗を決するのかというと、自分の体についているターゲットマークを破壊すればいい。

勝敗の基準は、自分のクラスで大将を決め、そいつがやられたら負けだ。

そして、自分のクラスが上位のクラスに勝った場合、クラスの地位が反転する。というシステムまである。

「まあ、こちらは学年トップクラスやし、楽勝やんなー蘭」

「そうとも限らないよ？油断したら、下位クラスに負けることもあり得るしね」

「そうっすよー、まあ同学年にやられる前に先輩のクラスはうちらが潰すっすけどねー」

鴨井もまた、学年の上位くらすである。羅衣も同じクラスだ。

「まあ、俺らがやられる心配はないだろう。もしまけたら、順位が入れ替わる。ただそれだけだし、別にいいけどね」

「順位入れ替わるってことは、進路の有利不利も変わるってこと

だよ？」

「蘭、俺は進路なんてどうでもいい……ぐばはっ……」

「そんなこと言うもんやないの！進路は、大事なんやからねっ！」
「わりいわりい」

「そういやあ、最近先輩の学年に入ってきた新入生って、どうなんすかねえー」

「どうって？」

「強いのかなって話すよーあと、どんな人なんでしょうかねー」
「私は会ったことないからわからんなあー」

「右に同じ」

「さらに同じだよー」

「まあ、こちらは現状維持がんばりますか」

——新宿・川沿いの某マンションにて——

「ふにゃあ……っつかれたあー」

「恵いーお疲れ様あー」

「ありがとーク口。本が売れるようになってからというものの、忙しすぎて困っちゃうよね」

「それ、売れない人にとっては嫌味にしか聞こえないよ？恵」

ソファーにゆったりと腰をかけている１８歳くらいの少女。２つ目の声は、その隣に座っている１５歳くらいの男の子。横に置いてある原稿用紙には、秋野 恵と書いてある。小説家のような。

「全くー僕らも有名になったものだねーほら、外見てみて」

「ほんとだ。マスコミや、一般人。いっぱいいるね」

「こんだけ有名だと、動きやすいのか動きにくいのか…まあ、僕の興味をくすぐるものはできそうだあー」

僕と言っているが、秋野 恵は女の子である。

「まあ、現実と虚構も思い通りにはならないということかあー」

「どういうこと？虚構は、自分がそういう風に作れば、そういう風になるでしょ？」

「小説なら、最初に決めた設定通り、筋書き通りにしなきゃいけない。駒を動かすにしても、その駒にも筋書き通り。話の筋にそつてもらわなくてはならないでしょ？だから、思い通りにならない現実ではもつとだ。駒を動かそうとしても、駒にはそれぞれの意思があり、必ず思い描いたシナリオ通りにはならない。だから僕は作つてみたいんだ。現実で、僕の描くシナリオをね」

「さいで」

恵はふーっと長い息を吐き、また机に向かった。

「ま、好きなだけやりなよ。僕は、恵のやることに従うからさ」

「もちろん。そうさせてもらうよ」

クロは「そう」とだけ呟き、そのままソファーに横になった。

——翌日 朝。学校にて——

「えー。只今より、戦争試験を始める！全員、ヘッドフォンをつけるように。」

ごつい体躯の先生の合図で、全員がヘッドフォンをつける。これが、仮想空間に行くための装置だそう。それにしても、なんでヘッドフォンなのだろう。

「では、戦争試験！始め！」

その瞬間。生徒の体が光に包まれ、意識が真っ白になる。

そして真っ白になったかと思えば、目の前には自分の教室が広がる。

「ふー。この感覚には、慣れないな」

「そうやねー。よし、じゃあどうする？」

「まず、俺と美菜と蘭は特攻隊。敵に突っ込んで行く。それから昨日決めた班で、守りと攻撃に分かれる。A班が守り。B班が攻撃だ。まず俺ら特攻隊が教室から、出て手近なあクラスからつぶしにかかる。そしたら、それに続いてB班も教室を出て、つぶしにかかってくれ。以上！作戦開始！」

俺と美菜、蘭は教室を飛び出した。

すると、Bクラスが待ち伏せている。

それを、俺が早撃ちで一掃する。美菜は、お得意の剣術で道を作っていく。幾人の生徒が仮想空間から現実に取り戻された。

「よし、B班！用意！」

「オーっ——」

「よし、美菜。蘭。あとはあいつらに任せて他のクラスをたたきに行くぞ！」

「わかったっ！」

俺らは敵勢の中を堂々と駆けていく。

「ハッハッハ！いい気分だぜっ！」

「黙れ。五月蠅い。」

俺はバルンに大してかまわず、次に近いクラス。C組を潰しに行く。

「見えた！C組の旗だ！」

「よし！行くよっ！」

美菜がまず敵に向かう。敵のターゲットを的確に、そして木端微塵に斬り刻む。

俺は後方から援護をする。

蘭は美菜に次いで敵陣に乗り入る。

ナイフでターゲットマークを次々と碎いている。

もう援護は大丈夫かなというころ、俺は敵の大将のところにもぐりこもうと教室に入る。

狙い通り大将は教室に居た。護衛は3人ほど。武器は、銃銃刀と言ったところだろうか。相手が撃ってくる前に、バルンを抜き放った。

そして、周りの護衛が一瞬にして現実に戻される。

「さてと、大将同士の一騎打ち。というわけですかー」

「……ッ」

俺はバルンでターゲットマークを撃つ。大将と言えど、所詮は学年

最下位クラス。倒すことなど造作もなかった。Cクラス大將は、一瞬にして現実に戻された。

これで、この学年は制覇しただろう。そして、1年生を次々と倒し、残るは2年だけとなった。2年も、2年同士でやり合ったはずだからもう残っているのはトップのAクラスだけだろう。

「あらあらあー先輩いー派手にやりましたねー」

「鴨井か。…げ、Aクラスほぼ全員生き残ってるし。」

「これはさすがにやばいかもね、龍」

「でも、美菜ちゃんと龍君と私なら大丈夫だよ」

「羅衣がいることも忘れないでくださいよー」

「先輩。覚悟してください。」

その刹那——羅衣が前に踏み出した。それが合図だったのか他の敵生徒も前に踏み出し、攻撃態勢に入る。前に、俺がその生徒の半分くらいを瞬間的に現実に戻した。

残るは、羅衣と鴨井。そしてその他数人だけとなった。

「とりあえず周りのやつらは俺がやるから、美菜は羅衣を！蘭は鴨井をやってくれ！」

「了解っ！」

俺はそれを聞き、うなずくとまたバルンを手にとって、周りの敵生徒を撃ちまくった。

そして、蘭は…

「鴨井の武器つてえー初めて見るんだよねーどんなのどんなのー？」

「まあまあー見たことなかったんすねえー」

鴨井は、一瞬だけ目を細めた。

「なら、見せてあげましょう」

「じゃじゃじゃじゃーんっ」

鴨井が取り出したのは、長めの槍。しかも、両刃だ。

「げ…蘭は分が悪かったか…」

俺は横目でそれを見ながらつぶやく。

蘭は、それでも余裕という表情で鴨井を見ている。

「じゃ、行くよー」

蘭は、ナイフを一つ。投げた。その瞬間、鴨井の体は宙を舞う。その隙に蘭はもう一本ナイフを投げる。鴨井はそれを槍ではじく。甲高い金属音が鳴り響く。

蘭は今度は投げずに鴨井に突っ込んでいく。鴨井は、槍を水平に構える。蘭はそれを選んでいたのか鴨井が槍を振るうモーションに入った瞬間に、天井に跳躍、そして天井にナイフを突き刺し、それをつかみ、一瞬だけぶら下がる。そして、後ろに跳ぶ。そして鴨井の頭上から、ナイフを投げる。

そして、弾かれることを予測して相手の死角に入ったと思った地点、もちろん空中からナイフを何本か投げる。そのうち一本はターゲットに。

「そんなアクロバットしたって、はじけるっすよ」

「…っな」

「先輩なめたらだめなんだからねー？」

鴨井が気付いた時には、ターゲットにナイフが刺さっており、そのターゲットは碎けた。

鴨井も現実に取り戻される。

そうこうしているうちに、敵の雑兵は俺が全部倒した。そして、あとは羅衣だけ

「正直いって、羅衣の武器苦手なんよね、合わないっていうかさあー。なんかあーこちらとしては分が悪いというか」

「そーですか。ということは、こちらにとっては相性が良いということですね」

羅衣は、鎖鎌を両手に持ち、いつでも来い。というように構えている。

対する美菜は、刀を腰の位置に持っていき、水平に構えている。

「じゃっ！いくでっ！」

美菜が、羅衣に突っ込む。水平に構えていた刀が羅衣の手前で素早く薙ぎ払われる。

羅衣は、身をよじらせてよけて鎖鎌の鎖で刀をまきつけようとする。

が、失敗に終わり美菜が羅衣の足を斬りつける。ここでは実際に斬

れるわけではない。

が、相手がひるむ。という設定になっている。その設定通り、羅衣は一瞬ひるんだ。そして、その隙に美菜はターゲットを突く。だが、そう上手くはいかず、羅衣は状態を立てなおし、後方に跳躍。そして、鎖鎌を投げた。投げたと言っても、鎖をつかんでいるのですぐ引き戻せる。操れる。美菜は、刀で防ごうとはせずに後方に跳躍。その後、高く前に跳躍。鎖鎌の鎖の合間を縫いくぐって、羅衣の懷に潜り込む。

「しまったっ…！」

《だめ…！たとえ試験でも、私は…！私は…！誰よりも強くならなくちゃいけないのに…っ》

「取ったあーっ！」

美菜の刀が羅衣のターゲットを貫く。

ターゲットは、無残にも砕ける。そこには俺らだけが残った。そして、試験終了のチャイムが鳴る。

俺らも強制的に現実に引き戻される。

戦場から無事帰還。今回もトップの名目を保つことができた。他のクラスは、順位入れ替えがあったところもあったらしい

まあ、あまり聞かない方がいいだろうと思ったから、あんまり聞くことはしなかった。

なにはともあれ戦争試験は、何事もなく無事終了だ。今日はもう授業はない。

校長の話を聞いた後、俺はとっとと家に帰った。

—— 同時刻 渋谷の某マンション ——

「いいねーいいねー全て俺の思い通りにことは進んでるっ！こ
うやってると、自分が神にでもなったような錯覚に陥るよねー」

精悍な顔つきをした美少年。“望月 空也”

はソファーに深くもたれて、ランプで遊んでいる。

まあ、遊んでいるといっても一人なのだけれど。

望月の視線の先には、威海がコーヒーを飲んでいる。

彼の部屋のデスクには、資料が山積み。そして、パソコンがある。

そのデスクに腰をかけて、威海はコーヒーを落ち着いて飲んでいる。

「ほんと、あなたって黒幕主義よね」

「いいじゃないですかー結構楽しいもんですよー？人を情報によ
って意のままに操るといのはねー」

「ほんと性格歪んでる。」

威海は無表情で望月の性格を批判する。

「あなたには言われたくないですねー」

「それで？この前頼んだ情報どうなったの？」

「それならあー…とつととー…このUSBに入ってます。」

「そ。じゃあ、お金ね」

「毎度ありー」

威海はデスクにお金を置く。すると、すぐさまその部屋を出て行った。

「彼女もまた、駒の一人なんだけどねー」

「そういえば、今頃DOTSの創始者様はどうなってるだろうかあー」

5章 「それぞれの日常・a」(後書き)

今回は、長いですねw

正確に言つと、今回”も”長いねw

いやあー

読むの大変ですねー

改行はしてるんだけどね

まあ、よんでくれたら幸いです

今回は新キャラ結構でたねー

これから、出るよb

僕の小説はキャラクター多いからねーw

それぞれが重要な役を果たします。

さて、黒幕キャラが2人いますね

そこは、後々わかります

気にしないでくださいwww

6章（戦争編）「崩壊の足音・1」

6章（戦争編）「崩壊の足音・1」

——試験後日 三田市 廃工場にて——

「何故、龍を殺そうとしたのかしら？」

「私らの大将のはずではなかったの？」

「あら、答えられないの」

「そう——」

バキッ…どこかの骨が折れる音がする。男が悲鳴を上げる。椅子に腰かけて男を見下ろすその声の主は、冷酷な目つきをしている。髪は金髪。腰辺りまで伸びている長い髪をおろしている。凜とした顔つきで、よく見れば美人だ。

「彩香さん…すいませんでした…！」

「誤って済むもんですか！ あの子を殺そうとしたってことは、国家反逆罪にもなりかねませんよ？」

「…おっしゃる通りです…」

「わかった、もういいわ。それよりね…」

「はい…？」

「龍が、今どこにいるか調べて頂戴」

「どこにいるか。ですか？」

「そうよ。私には何も知らされていないのよ…黙って出て行ったもんだから…」

「わかりました。早急に調べます。」

「そうして頂戴」

「おい！ 聞いたな、てめえら！ 龍さんの居場所を調べろ！」

この街で知らない人は居ないほどの有名人だ！　いろんな人に聞いてみる！」

——はい——

——同時刻渋谷の某マンション——

「僕が好きなものは、そう人のもがいてるところ。それを見るのが楽しくて楽しくてたまらないんだ。それを聞いたら、変人だと普通は思うだろう。そう、それが普通の反応。それでいいんだ。だけど、それじゃあー面白みつてもんがないじゃないか。だから、君たちには予想外の反応をしてもらいたいもんだね。」

「さてと、そろそろ僕はいかなきゃなあーあの変人のところに……」
自称変人の望月　空也は、マンションを出てとある喫茶店に向かった。

店に入ってあたりをきよるきよると見渡すと、そこには一人女の子がいる。その女の子のところへ望月は歩いていく。

「あ！　空也兄だあっ！」

「はあ……雪、あんまり大きな声だすなっ……」

「いいじゃんーっ！お兄ちゃんとの感動の再会を果たした妹が、大声をあげて席を立ち、手を振るのは当たり前のことですー……」

「もういいから、座れ」

望月は雪と向かいの席に座り、呆れた口調で言う。

「…にしても、雪お前何しに来た？」

「何しに来たってえー決まってるじゃない！ 転校してきたんだよ？ 剣銃学校に」

「ああ、そうだったな。」

望月が椅子にもたれかかって椅子をかたこといわせながら言う。
そして、コーヒーを頼んでいる。

「そうだよーっ！もしかして、忘れてたの？」

「わりいわりい…」

「ところでお前、どこに住むんだ？」

「へ？」

「へ？ じゃないだろ、ちゃんと住むとこ決めたのか？」

「…それはあ、そのお…」

「まさか…」

「そこでそこでお兄さんにお頼み申しあげたいことがあるのです
が…お部屋に、泊らしてはもらえませんか？」

望月はコーヒーを飲みながら思考を巡らせる。もしかしたら妹を上手いこと動かせば、いろいろ楽しめるかもしれない。でもでも、いろいろ厄介なことになりかねない。

等といった様々な思考が交錯し、望月は珍しく若干の混乱状態に陥っている。

そして、決断。

「よし、わかった。いいぞー泊めてやる」
「ほんと!？」

「ああ…その代りと言ったらなんだけどー」

「家賃は、払えよな」

「はうう…わかりましたあ」

望月はコーヒーを飲み干すと席を立ち

「じゃ、そろそろ僕はやることあるから帰るわ。地図と鍵渡しとくから、それで帰ってこれるだろ？」

「うんっ！ またね、空也兄！」

望月は、喫茶店を後にしてとある学校に向かった。その学校とは、
W S G H。

秋沢 龍一達の居る学校だった。

「やあ、先生お久しぶりです」

「あら、望月君じゃない。どうしたの？ 級に」

「実は、旅行部を見学したくて」

「うちの部を？ いいけど…見学してもおもしろくないわよ？」

「いいんです。ちょっと話したい人物がいるだけですから」

「そう、じゃあ案内するわ。ついてきなさい」

望月は旅行部顧問に連れられ、旅行部の部室へとやってきた。
それを見た龍一は目を丸くしている。

(望月…さん?)

「今日ここを見学したいって言ってきた望月 空也先輩よ。怒らすとろくなことないから、粗相のないようにね」

「望月 空也ですー。ここはもう3、4年前に卒業したんだけどー懐かしくなつて学校に来たつてわけでー旅行部なんてできたつて聞いたんでー気になつて見学しにきましたあー」

「さいですかー」

「よろしくお願いします」

「じゃ、私は職員室に戻るので、何かあつたら来てね」

「はい」

望月は、近くにあつた椅子に座る。

その椅子は、秋沢 龍一の向かいだった。

「なにしてんすか、望月さん」

「なにつてー、部活の見学だけど？」

「そういうこと言つてんじゃありません。どうせなんかまたろくでもないこと考えてるんでしょ？」

「人聞き悪いなあー」

「まあ、何もしないでくださいね」

「わかつてるつてー」

龍一は、ほつと一息つくと紅茶をすすりだした。美菜やその他部員は呆けた顔でこちらを見ている。

「えつと、今はこの前の旅行の新聞作つてるところです。…つていつても、あんまり何もしてないですけど」

「そつすねー、さっきからおしゃべりばかりつすからね」

「ほとんどはお前がアニメやゲームの話しか意味わかんない話しかしてるだけだろうが」

龍一が鴨井にチョップを入れる。美菜は、その間黙々と作業を続ける。羅衣は紅茶を飲みながら鎖鎌の手入れ、蘭は読書。という風に

思い思いのことをしている。
墮落してるな…龍一はつくづくそう思っただった。

「まあ、僕のことは気にしないでー、作業を続けてくださいよー」
「やってさ！みんな手伝ってよねっ！」

「ごめんごめん！今手伝う！」

龍一は美菜のところに駆け寄って、作業を手伝いにかかる。鴨井と羅衣と、蘭もしぶしぶ手伝う。

（ふーん。DOTSの創始者様はあー、今は過去を忘れ、日々楽しんでるわけかあー）

「あー、やっぱり用事思い出したから僕は帰るよー。じゃあ、作業がんばって」

「あ、はい。」

望月は、学校を後にした。

——なにしに來たんだろうね——

——翌日 休日の学校にて——

サッカー部長である音無 新市はレギュラーを率いて、職員室の前にて構えていた。

何をするのかと言えば、一目見ただけでだいたいは想像できる。皆一様に武器を持っているのだから。

「いいか？ これから職員室内に入り、職員を一人残らず殺害、最終的に校長を殺ってこの学校をダイナマイトで破壊する。」

「はい。でも、大丈夫すか？俺らだけで…」

学年首席ばかりの旅行部にも協力を頼んだ方が良かったのでは…

「その必要はない。俺らだけで十分だ。サッカー部の力、見せてやろうじゃないか。」

音無はいよいよ扉に手をかけた。そして、潜む様な声で

「全員、突入」

そう告げると共に、11人が一斉に職員室になだれ込む。

「サッカー部だ！殺されたくなければ全員手を挙げる！只今より、この学校を破壊する！」

音無は、銃を職員達に向ける。そして、手近の教師に撃とうとした…だが、その瞬間に何者かに銃が弾き飛ばされ鷹と思うと、音無の体が宙を舞った。

「…たく、俺らに喧嘩売るならもっと多人数できやがってんだ

…」

「校長…？」

サッカー部は全員で校長にかかっていく。

「…っ舐めてんじゃねーぞっ！」

「…たく、舐めてんのはお前らのほうだ…ろっ！」

校長は全員が殴りかかってきた瞬間に、拳一つで全員を気絶させてしまった。

ほんの一瞬だった

「お前ら、こいつらを警察に引き渡しとけ」

「はい。わかりました」

—— 同時刻 渋谷の某マンション ——

「ははは！ やっぱりサッカー部はおもしろいねえー、僕の望む行動をしてくれたよ」

「あんたって相変わらずおかしな人よね…で、どうしたの？」

「サッカー部の連中がー、レギュラーだけで学校に喧嘩を売ったんだよー威海さん」

「ふーん、ってなんでそんなこと知ってるのよ」

「それはー、隠しカメラだよ」

「は？」

「僕はあの学校に昔隠しカメラをしかけたんだよねー、それをこのモニターでチェックしているのさ」

望月は、自分が見ているモニターを指差す。

昔。とは望月が学校に通っていたころだろう。

「いやあー、やっぱり火種を蒔いという正解だったよー。昨日僕があんなこと言ったら、本気にして…まあ、本当の事を話したまでなんだけど…すぐ行動に起こしてくれるなんてさあー。いやあー、実に面白い！ これから、この火種がどうなるだろう！ 反政府主義だったあのお人は、どう動くんだろうねえー」

「どうでもいいけど、あんまり部外者を蒔きこまないでよ…」

望月が楽しそうに喋っているのを威海は呆れながら、眺める。

（やっぱ普通にしていれば、いい男なのに）

「ああ……！　僕は待ちきれないよ。あのお人が動くのが楽しみだ
あー」

このいかれた黒幕主義の男に、龍一の人生は再び大きく変化するこ
とになるのだった。

街を弄ぶこの男　望月は、今日もどこか楽しげに街を弄ぶ。

6章（戦争編）「崩壊の足音・1」（後書き）

おはこんばんにちは！

久しぶりの投稿です

ウーノも、そろそろいろいろ動きだしてきますよー

この望月が作った火種が、これからどんどんいろんな形でふくらんでいきます。

いやあー、楽しみです

そういえば僕の小説で今まで　　編ってついたことなかったなあ

7章（戦争編）「崩壊の足音・2」

第7章（戦争編）「崩壊の足音・2」

「何！？ サッカー部が学校を潰しにかかったって！？」

「そうらしいですよー。なんでも、部長が武装蜂起してー校長に銃を向けたところ、一瞬にしてはじき飛ばされたらしいです。それで、務所行きだそうっすよー」

「ふーん、今時反政府行為ねー…」

「そういえば昔私が住んでたところに、反政府を掲げる組織があったっけなあー」

「そうなのか？ 美菜」

「うん、まあねーなんか数だけは多かったからさあー印象に残ってるんだわー」

皆朝の新聞を見ながら部室で話しあっている。議題は、新聞の一面を占めた「サッカー部の反政府的暴動について」だ。

そもそも、反政府と言うのは最近出てきた風潮であって、そこまで広まっていなないと俺は思っていたのだけれど…まあそんなことはいとして、ここ十年ほどの総理大臣は気が狂っている。

というのも、最近になって総理大臣が好戦的になり周りの国との国交を断絶し今も恐ろしい兵器を作っているという噂だ。第三次世界大戦の苦しみを知っている日本なのにどうしてこんなことをするのか疑問に思えてくるけれど、それもあの男が変わったからであるからでなんらおかしくないことなのだ。

そして、そんな状況にあれば反政府という風潮が生まれるのもいた

しかたないことなのだと思う。

「てか羅衣と蘭はあー？」

「さあー？ まだ来てないよ。あの二人が遅刻なんて、珍しいよな」

「うん。そうだねー、何やっとなるんやろね」

「きつとあれじゃないすかあー？ リアルタイムで見れなかった深夜アニメを見てるんすよきつと。それでそれでー、実況できなかったことをブログで謝罪いーとか」

「ないってえー蘭はともかくとして、羅衣はないやろーそんなこと」

「蘭はあるのか？」

「そりやあゝ…腐女子やし」

「え！？ あれって噂じゃなかったの！？」

「ほらあー言っただじゃないすかあゝ僕と同じ人種だってえー」

「鴨井より重症じゃないことを祈るよ」

今は午前9時。どうしてこんな時間に部室に集まっているのかというと、先日の事件があったせいで授業はなし。部活はとりあえずやってもいいということだったので、集まることにしたのだ。

俺はふと窓をのぞくと、灰色の淀んだ空から雨が延々と降り注いでいる。縦にまっすぐの雨。まるでシャワーみたいだ。

ーボタンー

いきなりドアが勢いよく開く。

「遅れてごめんっ！」

蘭と羅衣が一緒に息を切らしながら部室に入ってくる。

「どうした？ お前らが遅刻なんて珍しいな」

「ちよつと…色々…あつて…はあ…はあ…」

「お茶飲むか？」

「飲む！」

蘭と羅衣は、ふらふらと歩いて椅子に座った。

俺はお茶を入れて二人に出す。

「…ふう、ありがとう。喉が渴いて死ぬかと思ったよ…」

「あれだけ走ったからね。」

羅衣が無表情で捕捉する。

蘭と羅衣は一気にお茶を飲み干し、生き返ったと言わんばかりに元気になった。

「ほんと遅れてごめん！ 二人でランニングしてたら、遅れちゃったあつ！」

「ランニングって…お前らも運動するんだな」

（うそだ。ほとんどの確立でうそだ。）

俺は軽く苦笑いすると、蘭は少し頬を膨らませて怒った。

「そりゃあっするわよっ！」

「そうやでー、蘭は昔から運動苦手やけどー走るのだけは続けとるんよー」

「美菜、運動苦手は余計だよ。余計。」

「蘭先輩走るんですかぁー？なんかイメージ崩れるっすよ…今

日遅れたのは録画した深夜アニメを見てたとかあゝ、突然二次元世界のようない体験をした。とかじゃないすかあ？」

「なわけないでしょっ！ばか！」

（あながち間違いではないかもしれない。）

俺はそんなことを思い、やめた。これ以上妄想をふくらますと殺される。

俺らがこんな馬鹿な話しを続けていられるのはいつまでなのだろうか。反政府主義が広まったからにはこれからさらに抗争等が起こるだろう。そして、もちろんあれも動く。

いや、あれを利用したら…

——同時刻・学校手前の広場にて——

「さあ、見つけたわよ…龍一。姉さんに黙って組織から抜けて出ていくなんて…でもいいわ。必ず引きもどすもの」

龍一の姉。彩香が学校前広場で大勢ひきつれて立っている。

「よし、私は行ってくるから。お前らはここで待っているように」

——S i i——

彩香はこつこつとヒールを鳴らし廊下を歩く。先生に保護者です。というと、すぐに入れてくれた。旅行部の部室の場所まで教えてもらい、龍一の元に一歩一歩確実に近づく。

彩音はまず何を言おうか考えた。まずは勝手に出て行ったことを怒るか。それともまず最初にこっちに帰ってきなさい。と単刀直入に用件を述べるか。

そんなことを考えているうちに旅行部の教室の前へとたどり着いた。

『さて、龍一…』

彩音の鼓動が加速する。久しぶりに最愛の弟に会ったのだ。緊張しないわけがない。

数秒間固まったままだったが、意を決してドアをゆっくりと開けた。

「龍一！ちよつと来なさい」

——しばしの沈黙。

そして、数秒固まった後、やつとのことで龍一は振り返った。

「姉さん…？」

「あんたに話があるから、ちよつと来なさい」

周りの部員は全員困惑している。龍一に姉がいることを美菜をはじめ、全員知らないからだ。

だが、一番困惑しているのは龍一本人であり、龍一は全ての思考が一旦シャットダウンされたかのような錯覚に陥る。

「わかった…じゃあ、みんな作業よろしく」

龍一は彩音と共にドアの向こうへと消えた。残った部員は突然の事態に静まりかえっており、しばし沈黙が漂った。

「で、何の用？ ていうか、なんでここが分かったのさ？」

「分かつてる癖に…DOTSの奴らに調べさせたのよ。で、用件というのは…」

「俺を、連れ戻しに来たのか？DOTSに」

龍一は瞬時に悟った。

「そうよ。戻る気はない？ 最近反政府論が広まってきたでしょ？ それに、最近政府が…私達のお父さんが何をしているか、知っているでしょ？」

「…ちよつと、1日だけ考えさせてくれないかな」

龍一は、下を向いて考えこんでいる。彩音は、仕方ないという様にうなずいて

「じゃ、明日。あなたの家に返事を聞きに行くから」

とだけ言い残して、学校を去った。

『あの子は、絶対帰ってくるわ。こっちに』

彩音は薄笑いを浮かべ、DOTSの皆を置いて町へと消えて行った。

「さて、返事。聞かせて頂戴」

彩音は龍一の用意した座布団の上に座り、お茶を飲みながら昨日の用件に対する返事を待っていた。

対する龍一は、顔に決意の色を浮かべ彩音の顔を睨みつけている。

「わかった…俺は…」

彩音はお茶を飲む手を休めて、聞く態勢に入った。

「俺は…DOTSに戻る。やっぱり、この学校は在ってはならない。それに、親父がやってることを見過ごすわけにもいかない。それに…これは非常に個人的な理由だけれど、まだ過去を清算できてないしな。」

「よし、じゃあ本当にDOTSの復活ね」

「ああ、そういうことだ」

7章（戦争編）「崩壊の足音・2」（後書き）

長かった

書くの時間かかりました

なんせテストでしたからねーw

いやあーw疲れましたよ

テストは、そこそこの結果に終わり

少し落ち込み気味でもあります

まあ、そういうことは置いといてですね

DOTSは、ここから日常が崩壊。

ここからが一番ファンタジックになるところです

街規模の話から、世界規模の話になってきます

そういうの好きだね

と、後輩から言われましたが

好きです。

規模は大きいほうがいいってどこかのだれかさんが
言ってた気がします。

感想よろしくおねがいします。

8章（戦争編） 「開戦の合図・1」

8章（戦争編） 「開戦の合図・1」

龍一は姉と共にとある廃工場に来ていた。

その他には、何百人かの若者がいる。そして、龍一とその姉、彩香は一番前の段差で立って何やら大声で叫んでいる。

「お前らっ！ 俺は再び此処に帰って来た！ 平凡で何も起こらない日常に憧れていたこの俺が！ この非日常の塊の中へと帰って来た！ その意味、お前らに分かるよな！？」

—— Si! ——

「俺らは、再び反政府組織として活動を開始することを宣言する！ それと同時に、先日サッカー部が実行したことを…あの学校を襲撃する！」

「それは、正気ですか！？」

「ああ、正気だっ！ そもそもあんな軍用兵士を育てるような学校は、今この世界に在ってはならないっ！ 人を何人が殺すようなことになっても、俺はあの学校を潰す！」

「ですが、生徒がこちらに対して抵抗してくるという可能性があ

ります！」

「生徒が抵抗してきた場合は、気絶させる
いいな？ 絶対に生徒は殺すな！ 実行は明日の12時30分、昼
食で生徒が一番気の緩む時間帯に襲撃を行う！ 合図があるまで校
門前の広場でじっとしてろ、いいな？ では、解散！」

龍一は段から降りると、廃工場を後にした。

残された数百人は武器の手入れ等今日やっておけることを各々やつ
ている。

龍一は、再び自分がこの場所に帰ってきたことに少し違和感を感じ
ながら夜の街に繰り出した。

憧れてた平凡。それらを捨ててまで政府に反抗する理由は、龍一に
は十分あった。

ある日、龍一がまだまだ小さかった頃に龍一の家で旅人が尋ねて
きた。

父は、その旅人を受け入れて数日間泊めてやった。そして、旅人と
家族数人での楽しいと気がほんのひと時だけ、流れた…

けれども父はその旅人が去っていくその日に、旅人が持っていた
宝を盗んで…

銃で殺した。

龍一は、ずいぶんと旅人になついでいて、旅人に相談したり、旅人
にたくさんのお話をしてもらっていた。

なのに父親は、その旅人を殺した。そして、それからというもの
父の行う政治は段々とおかしくなった。

人が変わったように今までとは反対の、好戦的振る舞い、そして好戦的な政治。

数少ない他国とも対立を深めていった。

そして父は、ある日龍一とその姉を何度か殺そうとさえもし、その結果二人を東京へと追い出したのだ。

そして軍国主義へと乗り出し、あの学校を生み出した。

そして龍一は、父を恨んでおり三田に居るころにDOTSを創り出し…そして今に至るというわけだ。

龍一は、夜の町をぶらぶらと歩いていた。

明日の開戦に備えて、自分が平凡にいれる最後の日を、この街を見て回ることに使うことにした。

龍一に大きな変化があったとしても、この街は変わらない。街は人を弄ぶ。

時には住人の変化を喜び、楽しみ。

時には住人の行為で哀しみ、嘆き。

時には住人の行為で傷付き…

街はいろんな姿を見せる。そして、今日この街は平凡だ。いつもと変わらない。

それが龍一にとってはすごくうれしかった。

誰よりも平凡を愛する、総理大臣の息子は様々な想いを胸に抱え、夜の街に消えた。

——渋谷 某マンションにて——

「そうかそうかあゝ、あの人がこちら側に戻ってきたのかあゝっ
！ これはおもしろくなってきたあっ！」

ソファーにもたれて笑う男が一人佇んでいる。

その男、空也は龍一の変化を一番楽しんでいるだろう。

自分の思う通りに事が進むというのは、とても気持ちのいいものだ
けれども、少しだけ予想外だったりもする。

空也はまさかこんなに早く復帰するとは思っていなかった。もう少し
遅く復帰するのかと重いきや、これだけ早急に事が進んだのだ。
ことさら気持ちがいいだろう。

「さあ、開戦まであと少しかあゝ。もう待ちきれないなあゝ僕は
楽しみだよ」

街は来る日にそなえる。

そして、明日までのほんの少しの間を楽しみながら、じわじわと歪
み始める。

8章（戦争編） 「開戦の合図・1」（後書き）

ウーノもAngel Magicも並行して執筆中ですよっ！笑

ウーノは、ほんとここから歪んできますよ
歪んだ話ですからね

Angel Magicは歪んでないお話です笑

たまには、こういう歪んでいるのもいいかなと思って書きましたよ
ウーノは

さてと、今回は短く切らしていただきました

いつも長いからねw

たまには切って載せるのもいいかなと

では、音時雨にて更新お知らせしていきます

<http://playlog.jp/gzza/blog/>

（戦争編） 「開戦の合図・2」

（戦争編） 「開戦の合図・2」

学校襲撃当日。龍一は、ゆつくりと立ち上がりバルンとアヤナを手に取り、家を出た。

「龍一さんよー、戻ったのはいいがあ、この戦い終わったらどうすんだあ？」

「そうよね。それが問題よね」

「この戦いが終わったら、本格的に親父を殺りに行く。」

「…そっか、龍一が言うのなら私たちは従うまでよ。」

「ありがとう。」

こつこつと龍一は学校に向かって歩いていく。今頃姉達は学校前の広場で待っているのだろうか。

この戦いが始まれば、今までのような平凡な日常には戻れない。やっと手に入った日常。大切な日常。それを自らの手で壊してまで成し遂げなければならぬことが龍一にはあった。

しばらく考え事をしながら歩くと、学校についた。

「みんな、出てこい。」

「龍一、来たのね」

「姉さん、さっそく始めよう…」

「全員！龍一の指示に従ってちょうだい！」

龍一は重たい校門を開け、ゆっくりと中に入って行った。

学校はまだ授業をやっている時間帯で、教室にしか人はいないだろう。

今日龍一は、体調不良で欠席ということになっている。

「さて、ここからは慎重に行くぞ。」

龍一はバルンを構え、慎重に隠れて合図をしながら職員室へと進む途中、さぼっている生徒を見かけ、焦ったが難なく職員室のある北館へと進むことができた。だが…

「ん…？　なんだあれ…」

「どう見ても不審者だろう。よし、警察と職員に通報だ。応援も呼ぼう。」

その会話が龍一達には聞こえていなかった。そして、気付いた時には…

「お前ら、そこで何をやっている！」

大勢の生徒に囲まれてしまっていた。

「…っち…見つかつたか」

「秋沢…？」

「あれ…りゅう？」

「先輩じゃないっすかぁー」

「…生徒は、殺すなよ…気絶程度に…やれ」

龍一がそういったとたん、DOTSのメンバー達は一斉に生徒にかかって行った。

「美菜、蘭、鴨井、羅衣。俺は…俺は三田に居たDOTSという反政府組織の…リーダーだ。今日は、この学校を…ぶっ潰しに来た！」

「ぶっ潰しに…?」

「そう、この学校はあってはならない。あのいかれた糞親父が、戦争目的で建てたこの学校は…あってはならないんだ。」

龍一は戦う味方をよそに、みんなに語りかける。

「確かに、先輩の言うことは一理あるっすねー。徴兵されたかないつすし」

「だねー」

「手を貸すよ、何をすればいい?」

「…なら、俺について職員室まで行ってくれ。」

「どうするの?」

龍一は少し間を置くと

「生徒全員避難させるように命じ、この学校を跡形もなく爆破する…」

「ド派手にな！」

「そいつぁ面白そうですねー。では、私共も力添えしましょう。そうですね？ 鴨井」

「そつすね。ていうか、久しぶりに喋ったつすね」

「じゃ、みんないいな？」

——うん！——

龍一達は生徒の相手をDOTSにさせている間に素早く、かつ慎重に職員室へと向かう。皆一様に武器を構え、走っては隠れ、走っては隠れを繰り返し、あつという間に職員室の前に来ていた。

龍一は職員室のドアノブを握り、がちやりという音を立て、職員室に入り

「教員に告ぐ！ 今からこの学校を爆破する！ こっちはなるべく人を殺したくない。だから生徒を非難させてくれ！」

「龍…くん？」

「すいません、先生。」

「……………わかったのです。生徒を避難させればいいんですね？」

「ありがとうございます…」

担任の先生は、走って行った。

残された教員と、落ち着いてコーヒを飲んでいる校長が一斉にこ

ちらを見ている。

「…では、この学校を爆破してどうするんだあ？ 返答次第では、牢屋にぶち込まれるぞあ？ てえめえらあ」

「爆破して…この国に軍国主義をやめさせる！ うちの狂った親父の始末をつける！」

「そうかあ、お前はああ現首脳の息子だったなああ」

「ああ、そうだ。あの変人逝かれ野郎の息子だよ」

「なあらばあ、親父さんの作ったこの学校を大切にすべきではないとは思わんかあ？」

「思わない。」

「そうかあ…ならば問答無用。学校を潰すならあまずこの俺を殺してみせろあ」

校長が武器を取った。これは未だに誰も見たことがないものだった。長い柄つきの大剣、無駄な装飾がなくただ赤いだけの剣だ。

龍一達も武器を構え、職員は部屋から出てこちらを見ている。職員室は広いが、職員のデスク等がいろいろあつて戦いにくい。ただ唯一、銃使いにとっては最高の戦場だった。

「よし、みんないいな？」

「おっけい、任せといて！」

みんな散り散りになり、龍一はそそくさとどこかに隠れ、美菜は先陣を切って突っ込む。

羅衣は美菜の後ろに、鴨井は意味不明な動きでうりよちよろしている。そして蘭はみんなの後ろ。一番後ろで構えている。

美菜が刀を横薙ぎに振るう。

校長は素早くそれを大剣で受け止め、弾く。

そして弾かれた後ろにいる羅衣は素早く鎖鎌を投げ、腕を蒔きつけようとし、それと同時に天井から鴨井が槍を下に出し降りてくる。そして龍一はひたすらに大剣を撃ち続けている。

羅衣の鎖鎌は素早く手ではじかれ、鴨井の槍は頬をかすめるだけだった。そして、今度は校長が大剣を構える。その間も龍一は大剣を撃ち続ける。

校長がまず美菜に向かって大剣を振るう。

美菜は後ろに素早く跳躍して避け、そして跳躍した途端にナイフが校長に飛んでくる。

校長は大剣で払おうとしたが龍一がナイフにちよつと銃弾をかすめる程度に当て、軌道を変えたおかげで校長の腹部に刺さった。

それを抜いて大剣を構え体をひねる。その時、龍一が大剣に炎の弾を当て、瞬時に氷の弾で撃つ。すると、順序に大剣が曲がり…校長

が回転切りをするころには、押し折れていた。

「これでもう終わりですね。校長」

「まあただあゝまだ素手があるう」

「素手と武器じゃあ、勝負は見えてます。」

龍一は起き上がって校長を…撃った。

——バン——と鳴り響く銃声、それと共に逃げ出す教員。生徒も脱出を終え、DOTSのメンバーも学校から出て行った。

「さてと、仕上げだ。」

龍一は校長のそばに十字架と爆弾を置き

「みんな！ 逃げるぞ！」

学校を後にした。

そして、校門を出て広場に出たあたりで爆弾は爆発。見事に学校だけが粉碎され、死人は、校長のみ。

「…ふう、終わったあゝ」

「終わったね…これから、どうするの…？」

「龍一！ 警察が…！」

「なっ…！」

姉が告げた時には周りは警察で囲まれていた。あの騒ぎの中、通報した人がいたのだろうか。それとも警察がパトロールでもしていたのか。

そんなことを考えている余裕はなく…

人を殺してしまった事実から、逃げることもできず…

先に逃がしていたらしいDOTSのメンバー以外。言えは旅行部と、
彩香は…捕まった。

（戦争編） 「開戦の合図・2」（後書き）

うん。戦いシーンが短いのと
展開が忙しすぎるのは、自覚しております。

次からは、獄中編みたいなw
無論、おとなしくつかまります。
次からが大変なんですよね
書くのも、読むのも

次からはあー
（ていうか、前からだけど）

場所がころころと変わります

—— 獄中にて ——

とか

—— 渋谷 某マンションにて ——

とか

—— 総理官邸にて ——

とか

いっぱいできますです

あと、今ブログのほうなんかサーバーに問題あって

いけないそうなんで

こっちの活動報告か、

小説感想記入欄に書いてくださいな♪

評価も受け付け中です

あの、コインみたいなやつねw
では！

（獄中編） 「暗く、寒い迷路」

（獄中編） 「暗く、寒い迷路」

——獄中——

旅行部と彩香はそれぞれ違う牢に入れられた。ただ、二人ずつ、らしい。

龍一と蘭は同じ牢に入れられ、もう一人知らない人。どこか大人びていて、ひげを生やしているおじさんがいた。

「…ごめん、蘭俺がみんなを巻き込んだばかりに…」

「私は、いいんだよ。こうなるんじゃないかなーって薄々は思ってたからね」

「…お前ら、何かやったのか？ もっとも、何もしないでこんな深いところに入れられることは、ないだろうが…」

「俺らは…ちよつと、学校を爆破しまして…」

「ほう…？ どの学校だ？」

「W S G Hです。」

「これはおもしろいな。あの学校を破壊するなんて…あそこにはめっばう強い校長がいたはずだが…？」

「その校長を…僕らが殺しました。5人がかりだったので、そんなには苦勞しませんでした…」

「5人…？ まだ他にも仲間がいるのか？」

「はい…」

「…そうか…っと、自己紹介が遅れたな。俺は黒灰^{くろがい} 白^{はく}だ。黒な
のか白なのかよくわからない名前だが…覚えやすいと思う。」

「俺は、秋沢 龍一。で、こっちが伊藤 蘭。」

「よろしくお願いします。」

二人がぺこりと頭を下げる。すると、向こうも礼儀よく頭を下げてくれた。

同じ牢で過ごすもう一人の男は、いい人そうな印象を二人に与えていた。

「さてと、二人に問いたいんだが…脱獄をする気は、あるか？」

「は、はい…？」

「俺はこの前から地道に穴開けてるんだ。そこを通ればこの牢からは抜け出せる、けどこの牢獄は暗くて寒い巨大な迷路みたいなものでな。あの校長を倒したとあれば、一緒に脱獄できるやもしれん。」

「無論、そのつもりです。俺はまだやらなければいけないことが、山ほどあります。」

「私も、こんなところで死にたくないし！みんなも助けないと！」

「意見は揃ったな…まあ、すぐに動くとは言うまいよ。少しここ

に慣れてきてからのほうがよいだろう…なあに、死刑宣告が出されたら急ぎ実行すればいいだけの話。心配はいらんよ。」

黒灰は、固い表情を崩さずにそれでいて優しい物腰で喋っている。そして二人は、黒灰の言うことに納得し、うなづく。

—— 渋谷・某マンション ——

「へー、捕まったのかあ。それはそれで面白いかもねー。あいつらは絶対に脱獄してー日本外に逃げるだろう。今のうちに手を打っておくかあ。あいつもすぐ僕が企んだことだっていうことに勘づくはずだからねー」

ソファーに深く腰掛け、空也は天井を仰いで喋っている。

デスクでなにかをあさっている威海はその一人事なのか、自分に向けてなのかよくわからない言葉を聞き流し、空也の方には目もくれない。

「まだ探してるのかい？ 威海さん」

「まあね…資料が見つからないのよね」

「お得意様だから許すけどー。そうでなければ今頃あなた、死んでますよー？」

「物騒なこと言わないでよ。ちゃんとお金は払ってるでしょ」

威海は資料を探しながら、空也の問いかけに応える。

そして空也は楽しそうに独り言なのかよくわからないことを再開した。

「さつてとー…あいつらが行くとしたらあー…」

空也は指で世界地図をなぞる。

「ここだ！」

——数日後・牢獄の奥深く・食堂にて——

「仲間は、ここにいますか？」

「…いません。」

龍一はあたりをぐるっと見回し、答えた。

蘭と龍一、黒灰は同じ牢に入れられているので、同じテーブルでご飯を食べる。

なんとも作戦が練りやすい。

「…そうか、どうやら完璧に分けられてしまっているようだな。

これでは、実行日には、闇雲に探すしかあるまい。」

「まあ、それが原始的だけど王道パターンですねっ」

「まあ、そういうことだな。」

「あの、そろそろ慣れてきたころですが…実効日は、いつにしましよう?」

「そうだな… 3日後だ。 3日後にあの穴を通って、抜け出すぞ。」
「はい！」

「わかりましたあっ！」

3人はこれ以上この話を続けることなく、黙々と食べ終わり、自らの牢に戻って行った。

—— 同時刻・美菜の牢 ——

美菜は、何故か一人で牢に入れられた。

彩香とも、鴨井、羅衣とも、もちろん龍一、蘭離れてしまった。そして、一人で牢の窓の外をのぞきこんでいる。

「皆は2人ずついれられて、他の人とも合同って警備の人言ってたのに、何で私だけ一人なんやらなあ…」

窓の外から視線を天井に向け、ため息をひとつ。

美菜の牢の周りにだけ、やたらと警備員が配備されている。

「あの、警備員さん……」

「何だ？」

「なんで私だけみんなと離されているんですか？」

「それはまだ言えないな」

「まだということは、そのうち言ってくれるんですね」

「ああ。処分が決定するまでにはな……」

「……わかりました」

美菜は再び窓に視線を移し、またため息を一つついた。

——イタリア・とあるマフィア——

デスクの椅子に座って、足を組んで偉そうにしている白人男性。
その男が、煙草の煙を口から吹いて部下に吹きつける。

「……ケホ……コホ……ッ……ええ……我々が長年探し続けているセフィロ
トですが……日本の旅人が奪い去り、現在は日本にあるらしいです。」
「それは、どこ情報だ？」

「例の新聞屋の情報です。あの新聞屋の情報は信用できます。」

「ああ、それとですね…日本の情報屋から、近々イタリアに日本の総理の息子とその友達がイタリアに来るらしいです。」

足組みしていた男性は、デスクに肘をつき興味有り気な態度を取る。

報告を続ける男性は、姿勢を崩さないまま直立して報告をする。

「ほう、彼奴の息子がか…どんな奴らだ？」

「えっと…この写真の、こいつらです。総理の息子は真ん中。」

「なかなか良い目つきをしておる…おもしろい。彼奴らがイタリアに来た時には、手厚く歓迎するでしょう」

「はい。」

—— 同時刻・鴨井・羅衣の牢 ——

「羅衣いゝ、暇つすよー。小説もないし、槍の爽流までいないんじゃないあ、やることないじゃないっすかあ」

「そうね、確かに暇かもしれない。でも、話し相手はいるじゃない？」

「そうなんすけどね…」

鴨井は、深くため息をつきだらしくなく冷たい牢の床に寝ころんだ。

「それに、やることは…あるよ?」

「え?」

「これだよ…」

羅衣が指差した先にはまだ小さいが、穴が開いていた。

「脱獄用の穴。」

「…羅衣? これ、この短期間で掘ったんすか!?」

「そうだよ」

「あんたは、神だあ!」

（獄中編） 「暗く、寒い迷路」（後書き）

明日から旅行です。

その間に呼んでくれるとたすかりますあんどよろこびます

それと、まだブログはふっきゅう

しないから、こっちで感想ください

11章（獄中編）「ド派手にやっちゃいましょう」

11（獄中編）「ド派手にやっちゃいましょう」

「ほら、鴨井も掘って」

「りよ、了解っす…ていうか、何で皆僕だけ名字なんすかぁー？」

「さあ？」

鴨井と羅衣はせつせと穴を掘る。

「不公平っす！ 不平等っす！」

「じゃあ、名前で読んであげようか…？」

「ほんとっすか！？」

「うん、えつと…翔、ちゃんと掘りなさい」

「はいっす！」

鴨井は羅衣の手の動きを盗み見た。

すると、羅衣は人間離れた早さで地面を削っている。削るのに何を使ったかというと、羅衣が隠し持っていた金属製の棒を使っている。

この牢は地下にあり、やたらと入り組んだ道に懲りすぎて地面にお金を注げず、土になっているのだ。
だから、穴を掘りやすい。

「…羅衣？ その手の動きやばくないっすかぁー？」

「これくらい、造作もないことよ」

本当なら——ガガガガ——などと音がしてもよいほどの速さで、ドリル並みの破壊力。速さだ。にも関わらず、ほとんど音が聞こえない。

「…翔？ 手の動きを止めて、その布団で穴をふさいで」

「なんでっすかあ？」

「看守が来るよ」

急いで作業を止め、布団で地面の穴をふさいだ。そうすると、間もなく看守が来た。

「…お前らの処刑日が決まった。他の連中も同じ日だ。」

「いつですか？」

「3日後だ。」

「そうですか…ありがとうございます」

「うむ。では、私は職務があるので」

二人は看守が去っていくのを見送ると、再び作業を再開した。

「3日後って、きつくないっすかねえ？」

「がんばって仕上げるんだよ、ほらもうだいぶ掘ったじゃない。

あともう少しすれば潜らないと作業できなくなるほどだよ」

「そうっすけどね」

「弱音を吐いている暇があったら、作業しよう。」

——彩香の牢にて——

「全く、龍一と話されちゃったじゃないのーっ ていうか、一人だしっ」

彩香もまた一人で牢に閉じ込められた。

そして、処刑日を告げられ、投げやり気味にぼーっとしている。

「まあいいわ。どうせあの子のことだから、脱獄でも狙ってるんでしょっ…」

彩香は、龍一の狂愛者。

愛しい弟の顔を思い浮かべ、一人うつとりとした表情になる。

——3日後・龍一の牢にて——

「今日が処刑日だ。間もなく看守がここに来るだろう。その前に穴に入り、仲間を探しだし、逃げる。いいな？」

「はい、白さん」

「いくぞ」

龍一達は黒灰の掘っていた穴に潜り、ひたすら直進した。暗いので突き当たるまで進んで、そこから上へ出る。

そこからは、迷路の始まり。

穴の中は狭く、暗く寒い。

「武器は？」

「奪われました…でも、僕はナイフを数本隠し持っていました。」

「私は火薬玉を数個。」

「生憎だが俺は何も持っておらんのでな。少しナイフを貸してはもらえないだろうか？」

「いいですよ」

ナイフを手渡し、ひたすら走る。

すると、結構早く突き当たった。そこから壁に両手両足を当てて、じりじりと上へと昇っていく。

そして、重たいふたを開けて出た先は、監獄の廊下の真ん中。

喋らないただのナイフを準備。

そして、廊下を駆けた。

牢があるたびに立ち止り、中を確認。

看守に見つかりそうになったら隠れ、また走る。

そして立ち止り、確認。隠れ、走る。

この繰り返し。

迷路のような監獄の中を駆ける三人。

—— 同時刻・羅衣と鴨井 ——

羅衣と鴨井もまた同じように駆けていた。

ただ、三人と違うのはド派手にやっているということだ。

出てくる看守達をメッタ打ちにし、冷たい地面に寝かせている。

というのも、羅衣が持っていた金属の棒を武器にして戦っているというわけだ。

対する看守達は、銃。

どうみても不利だが、羅衣が見事に銃弾を弾き、避けて懷に潜り込んでいる。

これだけド派手にやっていれば、龍一達に気付いてもらえるだろうという鴨井の提案。

「翔、また看守が来たよ」

「ド派手にやっちゃいましょうよ」

「…脱獄者だあつ！ 例の二人だあ！」

砲撃。

羅衣は走りながら弾を弾く。

砲撃。砲撃。

弾く。弾く。

鴨井も後ろに続き、看守との距離が縮まった頃、上に跳躍。

看守の額を棒で突く。

ひるんでいる隙に羅衣がみぞおちに一発。

後ろ首にも一発。

倒れる。

再び走り、龍一達との再会を目指す。

——同時刻・美菜——

美菜の処刑の順番は最初になった。

美菜は看守から皆が脱走中ということを聞く。

助けてくれる、そう信じて処刑室へとゆっくり向かう。

——同時刻 羅衣・鴨井——

看守が悲鳴を上げるせいで、看守に遭遇する率が高くなった二人。

そろそろ気づいても良い頃だろうと二人は思う。

どうせ看守に気付かれているのならば、いっそのこと大声で叫んでみる。

「先輩——っ！！！」

——同時刻 龍一達——

「ふー、ここまで来ても見つからないとは…さすがに広いな」

「ああ、そうだな。」

「ねえ、それにしてもさっきから看守にも会ってない気がしない？」

「そういえば…」

「ん？ なにか悲鳴が聞こえぬか？」

「ほんとだ、いつてみましょう！」

声のする方へと走りだした。

それは、割と近くだった。

声がだんだん大きくなる。

はつきりと聞こえる。

そして、声の発信源に居たのは…

看守数名と、羅衣と鴨井。

「え…？」

「羅衣く、鴨井いー」

「あいつらが仲間か…？」

「あ、先輩いー」

「以外な所で会うもんだな…」

羅衣と鴨井は看守を倒し、落ち着いたところで話をする。

「…っと、こんなところで話しては看守が来るな。さあ、いくぞ」

再び走りだした。

鴨井達が看守から手に入れたという地図を元に道をたどっていく。美菜が閉じ込められている牢へと急いで向かった。現在地点から一番早かったのだ。

そして幾分か走り、美菜の牢の前にたどり着いた。

そして…覗き込んでみても誰もいない。

「…な…」

「まさか…もう処刑場に…？」

「間に合うか…？」

「間に合わなくても、行くつすよねー」

「ああ、姉さんは…自力で脱出できるだろうから、処刑場に向かうぞ」

11章 (獄中編)「ド派手にやっちゃいましょ」(後書き)

遅くなりました

の割に出来が悪いw

それは承知のもとですw

それでもよんでくれるという心優しいかた
心から感謝ですっ

感想は、ブログの方に

<http://playlog.jp/gnza/blog/>

お待ちしております^^

12章（獄中編） 「始まりの話」

12章（獄中編） 「始まりの話」

処刑場へと連れてこられた美菜。

クロという男がそこに居て、怪しげな光を放つ石だけを持っている。処刑場は今までと比べモノにならないほど暗くて寒い。

そして、武器達もここに閉じ込められているようだ。

クロという男はその石を手中で弄んでいる。

「ねえ、この石。色が変わるんだよ。おもしろいよねー、無数の色に光るんだあ」

「それがどうしたっていうんですか。」

「…おもしろくない女だなあ。もう少しリアクションしろよ。」

「馬鹿じゃないの？ こっちは捕らわれてるのよ？ そんな余裕あるわけないじゃない」

「口は慎んだ方がいい…」

クロは手に意識を集中させて、前に突き出した。その瞬間。美菜の体は宙を舞い、そして地面に叩きつけられる。

「何…これ…武器は使ってないのに…」

「ほあ、口は慎んだ方がいいと言ったでしょう？」

美菜は地面に倒れたまま身動きが取れずに、もがいている。クロはそこにあった椅子に腰かけ、石をずっと眺めている。そして、一言。

「君……………」

……
「え……………」

——恵の部屋——

「あはっは！ 驚いてるねー驚いてるねーもっと驚けーもっと泣けーもっと呆けろ。」

あっはっはっはははは！」

机に向かい、一人大笑いする恵はパソコンに映る画面を楽しそうに眺めている。

恵は、人の表情を見るのが大好きだ。

そして、人を動かすのが大好きだ。

小説家である彼女は、世界を自分の筋書き通りにしたいと望んだ。

そして、それを実行できる力を恵は持っている。

総理大臣に取り入っているし、コネだつてある。

財もあれば、行動力もあり、信頼もある。

そして、自分に定評がある。

変にスキャンダルなどされていないので、ファン達は素直に彼女を応援している。

このような環境が、人を利用するのが容易となる環境なのだ。

そもそも恵が何故このような思考を持つようになったか。

それは、ある日に遡るのだが。その話はまた追々していこう。

だけれど、全ての始まりくらいは今話してもよいかもしれない。

全ての始まり、それは小説を書きながら旅をしていた時、書いた日記。

それが全ての物語の始まり。

世界の醜いところ、素晴らしいところ。

人間の醜いところ、素晴らしいところ。

世界の全てを記した日記。それが全ての始まりだ。

そして、その日記を書きながら、小説を書きながら旅をしている時。ある街である石に出会う。古物商が売っていたその石は、七色どころか、無限の色に光るとてもともきれいな石。

それを手にして、旅をしていた。そこまでは、何の問題もなかったのだ。

その石の名前は…セフィロト。

それを恵は知らなかった。もちろん使い方も。どのようなものなのかも。

ただ、ある人の家に泊まりある人に殺されかけるまでは…

ある街で出会った一人の少年。まだまだ幼かったその少年は、旅人である恵を家に泊めると言った。

恵はその親切に肖り、泊めてもらうことにした。そして、3日間楽しい日々が流れた。

恵はそろそろここに腰を落ち着けてもいいか。等と思うようになり、日々少年と遊び戯れていた。

そしてある日。

その少年の父親が、旅人の持っていた綺麗な綺麗な石を盗もうとした。

そして、その石を手にした瞬間。

その父親をなにか黒いものが包んだ。

そして父親は、気が狂ったように毎日暴れ倒した。

恵が調べてみると、その石というのはとてもなく危ないもの。だけれどとても魅力的で価値のあるものだとした。

その石に触れて、己の願望をつぶやけば…それが叶うという代物。どんなインチキなことだってかなう。

たとえば、不老不死になりたい。

宇宙人を呼んでほしい。超能力を使いたい。

物に魂を与えたい。

だけれど、その願望が“野望”もしくは“悪事”の場合、石は使った人間に悪しき性格を与え、しばらくそのショックで暴れるという。そして、その父親は願った総理大臣という地位を手に入れた。

その代りに、本来の性格を失いそして邪悪な性格を手に入れてしまった。

そして、邪悪な父親は…石を自分の物にしようとする。

まあ、人間の心理からすれば当然のことだろう。

こんなに便利で魅力的なものを目にし、一度使ってしまったらどうしてもそれが欲しくなる。

子供がよくゲームを買う前、インターネットでホームページを見たりしてそのゲームが欲しいという願望が強くなるのと同じことだ。

そしてその父親は手に入れる手段を交渉ではなく、武力で奪おうとした。

石を守る恵に銃口を突き付けて、引き金を引く。そしてその瞬間。恵は不老不死になりたいと願い、撃たれて血が流れ死んだ後。助かったのである。

父は、石を持ち逃げ。

少年は家を飛び出した。

恵は一人そこに倒れている。そして、しばらくして…生き返ったのだ。

それからというもの、この自分の筋書き通りに人を動かすということに目覚めたのである。

一人でパソコンの画面を見てにやけている恵。

彼女は、とても楽しそうに愉しそうに…人が驚くさま、あがくさまを見ている。

——龍一達——

龍一は、走りながら物思いにふける。

美菜を助けたい。美菜を助けたい。

そして、どこか遠くへ逃げよう。

ただ逃げるわけではない、どこか遠い国に行って日本政府を改変する手立てをする。

そうだ。そうしよう。

龍一は、昔からずっと独りだった。

親は仕事でかまってくれず、友達という友達も居なかった。ただ、自分に絡んでくる者はいた。

だけれどそれは友好的なものとは言えなかった。からかい、罵り。使い走り。

そのようなものばかりであった。別段嫌われるような顔つきでもなければ、性格でもない。

じゃあ、何故か？

それは態度だった。昔から図太い態度で椅子に座っている。そして、我がもの顔でいるのだ。

そんな龍一が気に食わない人間が、罵ったりするのだが。

それも別段気にしているというわけではないようだったから、逆にいじめっ子を煽ってしまう結果となってしまったのだ。

そして龍一は学校でも放課後も家でもずっと独り。小学時代はずっと独りだった。

そんな時、旅人が街にやってきた。

その旅人は、美人というよりものすごく可愛らしかった。

その可愛らしさに小学生であった龍一は見蕩れ、うちに泊まりなよと声をかけた。

そして、泊めることになる。

毎日のように遊んだ。遊んで戯れてずっと一緒にいた。一緒に寝て、仲がいい姉弟のようだった。
だけれど、それも長くは続かない。
幸せな日々は壊れやすい。

ある日、旅人は…龍一の父親の手によって、殺害された。
血を噴いて死んでいく旅人の姿を。

あの明るかった大好きな旅人の新で行く姿を間近で見っていた。
銃殺。一瞬で終わった。

父親は旅人の私物だけを持って逃亡。

龍一もわけがわからず家を飛び出した。

唯一の友達を、姉の様な人を殺した父を龍一は許しはしなかった。
そして、あの組織を作ったのだった。

だけれどある事件で嫌気がさし、東京へと逃げる。それから友達ができ、彼女ができた。

今は幸せ。この日々を壊したくないと願った。

だけど、自らの手で幸せも壊してしまう。

今は、独りぼっちではない。

それだけが、龍一を駆り立てるのだ。

大切な人をもう一人として失いたくない。

父親が狂った原因を突き止め、父を殺した後、にそいつも殺す。

それだけが頭の中を渦巻いていた。

12章（獄中編） 「始まりの話」（後書き）

ふー

そろそろね

日本にいるのも終わりかな

イタリアかぁ・・・

行きたいですね笑

実際に笑

感想お待ちしてます

活動報告でも、ここの感想欄でも

ブログでも

ブログはここですよ

<http://playlog.jp/gzza/blog/>

好きな記事にコメントしてってください

あと、感想書くときは

どの小説の感想かを

明記していただけると助かります。

では！

13章（獄中編）「処刑」

13章（獄中編）「処刑」

美菜は目の前の男が放った言葉に驚愕した。

「……って…そんなこと…できるわけないやんか…」

「結論は出さなくていいよ、どっちみちそうなるんだから。」「
どういうこと…？」

「まさか。」

「察したようだねー、そうさ。そのとおりなんだよ」

「…美菜は少しうつむいて…」

小さく、笑った。

その時、処刑場のドアが勢いよく、又は乱暴に開けられた。

龍一達が美菜を助けにやってきたのだ。

けれども美菜は…

「あーあ、いいとこだったのになあ…」

「何がだ！」

「まあ、そんなに力まなくていいじゃないか、ほおら…武器はそこにあるから、とっちゃえばいいよ。」

「…？」

龍一は何か変だと思いながら武器を手にとった。

美菜の刀も取って、自分の銃も取る。

みんな手には武器を持っている。

黒灰だけはないのだけだ。

「で、どうするんだい？」

「わかってんじゃないのか？ もちろん、こうするのさ。」

クロは余裕の表情。それどころか、口から笑みがこぼれている。明らかに笑っている。嗤っている。

楽しんでいる。愉しんでいる。

龍一は美菜の刀を右手で持ち、バルンを左手で。

そして襲い掛かった…

のだが…

あれ、宙を飛んでる。

空に舞う龍一。周りはみんな啞然。

「あーらら、やめといたほうがいいよーって言う前に突っ込んでやうんだからー。」

クスクス。

嗤う。

地面にたたきつけられる。

「まあ、悪いことは言わないからさあ…飛んどきな。」

その瞬間石が光る。

飛び、部屋から追い出される一同。

部屋には鍵が閉められる。

「美菜!!」

部屋に戻ろうとする龍一。

「待て!」

制止する黒灰。

「何故ですか!？」

「心は決めたい……？　まあ、その調子じゃあ……言うまでもないか。」

「…心なら、とくに決めとるわ。あはは…あっはっはっはははははは！！！」

響く高笑い。

空港の龍一達には聞こえるわけもなく。

ただ、その部屋中に鳴り響くだけ。

暗く、寒い部屋。

そこに二人。

一人は心を……

13章（獄中編）「処刑」（後書き）

遅くなりました。スランプ、まだ続いてるみたいで…

えっと、次からイタリアに行きますよ
美菜、どうなったんでしょね

予告的なことをしとくと、
龍一は、やさぐれ？
ます。

そして、羅衣の登場回数が増えます。
鴨もね

では、感想くれるとうれしいです
活動報告でも、ここの感想欄でも

こちらのブログでもいいんで
感想お待ちしてます

<http://playlog.jp/gzza/blog/>

14章「荒んだ心」

14章「荒んだ心」

数年後、とあるイタリアのマフィアにお世話になることになった龍一達。

マフィアの仕事を手伝いながらも、日本総理大臣に刃向かう為の準備をしている。

そして、龍一は…

「…つてえな…」

「痛えつていつてんだよっ!」

不良に肩をぶつけられ、マジギレの最中。

「すいません!」

必死の形相で謝っているにもかかわらず、謝罪の言葉を全く聞こうとしない龍一。

そして、問答無用で…

刀を横に振るう。

峰打ちだったのがせめてもの救いだった。

不良は2mほど吹き飛ばされ、地面にたたきつけられる。

「…ふん」

その場からゆっくりと立ち去る龍一。

そして、ある店に入って行った。

「また派手にやったな、龍一さんよ」

「いいんだよ。向こうが悪いんだ。」

「ほんと、変わっちまったなあ。龍一さんよあ」

「バルンは黙ってて」

「あいよ。」

「マスター、いつものくれ。」

カウンターテーブルの席に座り、マスターに注文をする。
この店は、龍一が面倒見てもらっているマフィアの店だ。

「人は変わるものです。よくも、悪くもね。」

「分かてるけどよあ。」

「はい、いつものコーヒーとサンドウィッチでございます」

「ありがとよ」

荒んでしまった龍一あっても、一応お礼くらいはする。

最低限の礼儀までは捨てていないようだ。

それを捨てると、人間終わりというものだけれど、今の龍一は人間
と終わりのラインをギリギリで彷徨っている感じである。

真昼間の日差しに照りつけられながら、涼しくない店内でコーヒ
ーとサンドウィッチを食べる。

いつもの昼食。

この後には、軽い仕事を控えているため、今日は軽い食事に済まし
ている。

マフィアの仕事というのは、島を巡回するだけでなく、いまどきの
マフィアはギルドのような仕事をしている。

いろんな人から依頼を集め、解決。

何でも屋と似ている。

「今日の仕事はどういったものなのですか？」

「説明臭いセリフだな…。今日の仕事は、最近増えている化け物の調査だ。」

「ずいぶん大変そうですね…」

「あの化け物は例の事件をきっかけか。日本から出現して、方々に散っているようですね。」

「例の事件なあ…。やっぱ、あの石か。原因は…」

「そうですね。」

刀が考察をする。

この刀というのは、美菜が持っていた刀だ。

「あの化けもの…俺の予想だけだな、日本の国会議事堂とか。政治的な事をする建物から出ていると思うんだ…おそらく、親父の所為だな。」

「あの親父ならやりかねんなあ、龍一さんよ。」

「ああ、ほとんど間違いねえ…憶測だが、これは間違いない。」

最後のサンドウィッチを食べ、コーヒーを飲み終えて話も終わり。丁度その時、羅衣が店に入ってきた。

「そろそろ行くよ、龍一。」

「ああ、わかった。今行く。」

「いつてらっしゃいませ。」

「お代、ここに置いてくぞ。」

「ありがとございました。」

龍一達は店を出て、みんなと合流。

へりに乗り込み、今日の仕事現場へと向かう。

最近出現し始めた化け物の調査。

例の事件から、日本で見られるようになり、全世界に広まって行った。

日本政府は虚無から出てきていると主張しているが、イタリア政府やその他の国の政府は日本政府を疑っている。

一応、虚無を調べたりはするが…

まずは目撃現場へと向かう。

「化け物っすかあ… おかしな世界になってしまいましたねえ。三次元と二次次元が混ざり合っているような… 妙な世界っす。」

「確かに、おかしな世界ね。翔」

「もともと虚無なんてものができてるのがおかしな事なんだよ。そして、セフィロトとか宗教上のものだと思っていたものまで実在。全く、おかしな話だ。」

「そして、この俺達の喋る武器も… セフィロトを使って、魂吹き込んだらしいぞ」

「どれもこれも、あのいかれた親父が根源。ってことか…」

「そうですねえ…」

龍一は周りの景色を見渡す。

あたり一面に広がる砂の海。

どこをみても

砂、砂、砂。

砂しかない。

龍一は、目を凝らして見てみる。

すると、明らかに人間のものではない足跡を見つけた。

「ちよつと、降りるぞ。」

そう言っつて、全員ひきつれて降りていく。

目的地も確か、ここらだったはずだ。
おそらくこの足跡が、化け物の…

「よし、この足跡をたどるぞ。」

「いいや、その必要はないみたいっすよぉ？」

鴨居が指さす方向を見ると、大きい人型の化け物が現れた。
腕が2対8本もあり、阿修羅を想像させる。
そして、鬼のような形相。
足はとても大きい。

「あれか…」

「あれっすねえ。」

「あれだな」

「あれだねー」

「あれね」

「…」

沈黙の1秒後…

化け物は龍一達を睨んできた。

ひよつとしたら勘違いかもしれないが、これは確実にこちらを睨んでいる。

そして、大きい体からは想像がつかない速さで…

迫りくる！

迫りくる化け物！

「…」

「よし、一斉にかかれ」

14章「荒んだ心」(後書き)

<http://playlog.jp/gzza/blog/>

感想はこっちにおねがいしますね^^

15章「化け物>人間」

15章「化け物<人間」

龍一達は一斉に化け物へとかかっていった。
腕が4対8本。

圧倒的不利。どう攻撃しても防がれてしまう。

龍一が第一撃を加えようとするが、腕に払いのけられる。

そして、空中で身を翻し再攻撃。

その瞬間黒灰がハンマーで化け物の体を吹き飛ばす。

龍一がまた空中で身を翻し、化け物の体を斬る。

化け物は数m吹き飛ばされた。

「遺伝子変異…か。」

そう、龍一の体はあの日以来異常が起きている。

というのも、セフィロトの攻撃を受けたことで、遺伝子にセフィロトの力が入り込み遺伝子変異を起こしているのだ。

そのためか、少しの攻撃で相手は吹き飛んでしまう。

だが、これで終わらないのが化け物だ。

化け物は空中で身を翻し、腕を尖らして龍一に向っていく。

そこですかさず鴨井が槍で応戦。

龍一は態勢を整え、鴨井と黒灰がひきつけている間に羅衣の鎖鎌が相手の腕を巻きつける。

そこで龍一が上から剣を振りおろし、ゼロ距離で銃を撃ちつける。
見事な連係プレー！。

「やったか？」

「いや、まだだろう。」

「しぶといわね。」

「まったくすよ…まず手が8本っていうのが反則的っすよねえ」

全員、化け物と間合いを取る。

そして、龍一が後方に回って二丁拳銃で応戦。
連射連射連射。

そして、鴨井が上に回って槍を下突き。

羅衣が近距離で戦う。

8本の手とうまく戦い、相手に隙を作ろうと必死。

羅衣に四方八方からとがった腕が迫る。

それをうまくかわしながら、体を斬りつけていく。

右から左から下から上から前から斜めから来る攻撃を神的な動きで回避。

今度は頭を斬りつける。

すると、相手に隙が出来た。

「今」

黒灰がさかさずハンマーで頭を打ち付ける。

すると、相手の頭がへこんだ。

「こいつはいけるぞ。」

「弱点発見っすねえ」

「よし、一斉にかかれ！」

全員一斉に化け物に攻撃。

羅衣は隙を作り、鴨井はそれを手伝って龍一と黒灰は頭を攻撃する。

すると、一瞬にして化け物は地面に伏した。

「終わりつと…」

「これ、持ち帰るか。」

「そうだな、調査っていう仕事だったからな。こいつを持って帰ったら十分だろう。」

—— 日本・東京渋谷・某マンション ——

「どういことだとういことだとういことだ！ 俺の思惑から大幅に外れている。これは誰の仕業だ！ 俺はあんな化け物の出現までは望んでいない！」

パソコンの前に座り、悔しそうに嘆く。

すると、パソコンの画面が真っ暗になり…
声が流れてきた。

「ふふふ…君のターンは終わりだよ、空也君。」

「その声…恵か…」

「久しぶりじゃないか、空也君。中学以来かな？ セフィロトと一体化は果たしたかい？」

「そんなものには興味がわかないな。だけど、その質問にあえて答えるなら…武器だけは一体化してるようだ。」

「そうかそうか…ふう。そろそろ本題に入らせてもらっけどね…

君の事、大いに利用させてもらったよ。」

「どういことだ？」

「おや、気づいてないのかい？」

「だからどういことだ」

「今まで、君の思う通りに進んだと思ってるか？ でもね、それは間違いだよ空也君…。全ては、僕の思い通りなんだ。君は僕

の手ごまの一つにすぎないんだよ。そして、化け物の出現も僕の思惑さ。総理大臣も大いに使わせてもらったよ。そしてなにより、君がいろんな人を動かしてくれるから助かったんだよね。ねえ、今度：会わないかい？」

「いいぜ、会おうじゃないか」

「あれ？ 驚かないんだね」

「いいや、むしろ嬉しいよ。」

「そうかい。じゃあね」

ブツン。

パソコンの画面が元に戻る。

空也は、楽しそうな笑みを浮かべながらトランプで遊ぶ。

「殺す」

—— イタリア・某研究所 ——

「これが例の化け物ね？」

「はい、これが俺達が遭遇した化け物です。目撃情報も、こいつのものと。」

「これがあれば調査が大いにはかどるわ」

「では、仕事はこれで終わりってことでいいですか？」

「はい、お疲れ様。上には通しておくからね、今回の報酬はこれね」

「ありがとうございます。では、失礼します」

研究所から出ていき、自分達の家に戻ってきた。

ハードな仕事を終えて一段落。

今日はもう仕事は入っていないので、みんなゆつくりとしている。

ジャズを聞きながら、ゆつたりとした時間が流れていく。

ただゆつくりと。

15章「化け物>人間」(後書き)

うん、戦闘短いですね

俺虚無はなんかもう少して終わりそうな勢いですが

これはまだまだ終わりませんよ

よろしくです^^

感想は、活動報告か

感想欄か

ぶろぐにお願いします

↑ぶろぐURL

<http://playlog.jp/gzza/blog/>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0308/>

こんなにも醜く薄汚れた世界

2010年10月9日23時51分発行